

そこに島崎君は住んでゐた。

それは後年、島崎君が『奉公人』と言ふ短篇の中に書かれた家である。そこで島崎君は凍る墨を呵して、『水彩畫家』の一篇を書いた。

夫人と子供達——あの明るい賑やかな人達がもうこの世にゐないと思ふと、何とも言はれない感傷な念に撲たれずには居られない。私達はその時何を話したであらうか。イブセン、でなければビョルンソン、でなければ、トルストイ、モウバッサン。で、夜更るまで私達は飽くことなく話した。ハウプトマンの『寂しき人々』などの話は、殊に、家庭を問題にしてゐた私達に共鳴した。

そして其夜は火燵に寝た。

私の胸にも、創作に對する熱が盛んに燃えつゝあつた。何か仕事をしなければならぬ。何か目に立つやうな事をしなければならぬ。かう思ひながら、混亂した思想と觀察とは何うも一致しないで困つた。で、あくる日は、小諸の古城址へと私達は遊んだ。松林の間から連山の雪がきらきらとかゝやいて見えるやうなところだ。島崎君が何遍か東京に行くのだと言つて見送つた汽車が、黒い凄しい煤烟を擧げて、すぐその傍を通つて行つた。

東京に歸ると間もなく、戦争が始まつた、世間は騒がしくなつた。號外の聲が町から町へと響き渡つた。私の二番目の男の兒は、津輕海峡を敵艦が襲つた日に生れた。人生の波、険しい波は私の生活にも

次第に深く入つて來た。

社に行くと、坪谷君は、

『君、戦争に行かんか。』

『行きます。』

かう激昂して私は答へた。

國木田君は其時、芝の櫻田本郷町で、『近事畫報』の編輯をしながら、絶えずその短篇を世に公にしてゐた。

やがて私は戦地に立つた。島崎君は従軍の希望で、私の立つたあとをやがて東京に出て來たが、好い口がないので、再び山の上に歸つて、従軍したつもりで、あの長篇『破戒』の最初の章を書き始めた。

作家短評

恐らく紅葉山人も生きてゐたなら、四十五の年まで生きてゐたなら、その作品に大きな變化を起したであらうと思ふ。紅葉の作品には外形には模倣、内容には未だ深く鍛錬しないものが多かつた。かれの骨の折つたのは文章で、その文章が西鶴のやうな内容の充實——書かすには居られなくなつて筆を執つたといふやうな充實と漲溢とを持つてゐないために、文章と内容とが離れ離れになつて、死語が多い。

外面は美しい錦でも内部は色の褪せたつくり花であつた。

しかし、これも無理はない。かれはまだ年が若かつたのだから、世相に觸れたと言つてもさうまだ深く觸れてはゐなかつたのであるから……。だから、今日まで生かして置きたかつたと思ふ。

獨歩はその意味に於て、まことに早熟の天才であつた。かれには紅葉の外面の美よりも裏面の褪せた色がはつきりと映つて見えた。『ちつとも内部に觸れてゐないではないか。いくら綺麗だつて、死んでるちや駄目だ』とかうかれはいつも紅葉の作を批評してゐた。

硯友社の人達の中では無論、柳浪が一番深かつた。次ぎに、眉山が文章の型から出ようとして懊惱した。水蔭は『水車』時代には、奇警な清新な短篇を公にした。かれなどはもつと／＼出て行かなければならない人であつた。しかし惜しいことには、其時分の文壇の空氣が妥協的で、外交的で、乃至朋黨的で、『群』としての境にとゞまり且つ安じてゐる人達が多かつた。千朶木山房主人の様な孤往獨邁の氣分に富んだ作者が少なかつた。つまり自己を深く信ずることが出来なかつたのである。それは柳浪なども、今でもさう言つてゐるさうであるが……。

柳浪の寫實は、一方『深酷』といふ世間の評語に欺かれて、わざと心にもない誇張をやるやうになつてから、段々その純なところを失つて來た。續いて達意な筆の才に任せて、寫實そのものが書齋で空想した寫實になつたがためにその光を失つた。更につゞいて、今度は事件の筋を運ぶ材料に會話を使用し

た。最も大切で、且最も生氣を帯びなければならぬ會話を……。

水蔭には寫實に甘んじてゐられない一種の理想的なところがあつた。そしてこれが芝居らしい不合理と不統一とに續いた。シーンを描く作家としては、確かに時流に一頭地を出してゐたのであるけれども、その誇大な理想的なもののためにそれを打壞して、一種のマンネリズムが出て來た。それに餘りに『新聞小説』といふものに重きを置きすぎた。しかし柳浪にしろ、水蔭にしろ、眞に、社會でなしに、自己を信じてゐたならば、新しい潮流がいかに凄しく漲つて來ても、すつかり押流されずに、一握の藁位は攔む事が出來たに相違ない。惜しい事には、『群』としての上に、『自己』と言ふものをつかりつかむものがなかつた。唯一人、自から刃を咽喉に當てた眉山ばかりが、『群』以上に或物を自覺してゐたと言ふことが出来る。

唯、露伴だけは、今でも謎である。修養、教訓などと云ふ方面に出て行つた形から見て、藝術家としての眞意を疑ふものもあるが、私には何うしてもさう思はれない。獨歩も、露伴には重きを置いてゐた。無論紅葉以上に重きを置いてゐた。『露伴は駄目だなんて言ふが、今の若い者に押されて出られなくなるやうな彼ではない。今に、屹度えらいことをやる。アツと言ふやうなことをやる。』かう獨歩は常に言つてゐた。ところが、『天うつ波』でかれは躓いた。否、躓いたと言つては語弊があるかも知れないが、兎に角あれは期待が大きかつただけに、成功が著しくなかつた。それに、『出廬』といふ詩が、當時の新時

代の詩人に笑はれた。しかし、私は今でも露伴を『名和長年』だけとは思つてゐない。矢張未だに謎である。

自己を知るといふことと、新しい知識と言ふことが、あの新時代の大きな潮流の基底を成してゐたのである。それをおろそかにしたものは、皆な押し流された。大きな家屋も、小さな家も、乃至は一村落と言つたやうなものも……。

徳富蘆花などは、その中にあるて、自己を割合に深く知り、且つ新しい知識を積むことを怠らなかつた爲に、思想は舊く且つ通俗的であつても、それでも一握の蘊をその潮流の中に握ることの出来た好い例だ。湖處子、嵯峨の屋、さういふ人達は、皆なその自信のないために流された。

千朶木山房の主人と、早稻田の逍遙博士とは、その態度に於いて、又はその位置に於て、まことに兩極を成してゐると言つても好いほどそれほど好對照を成してゐる。千朶木山房の主人は、飽までも孤往獨邁である。『箇』の人である。かれの周圍には、子分とか弟子と言ふものがない。煩さくなると、かれはいつでもそれを振拂つて了ふ。『文づかひ』の中のイイダ姫がかれの最も好きなヒロインであるなども、それを考へると深い意義がある。かれは唯自分の好きなことをした。ひとりて自分の歩く路を切り開いた。世間とか、社會とかはかれの間ふところではなかつた。

そのかれが、新思潮の潮流の眞中にあるて、イブセンの『建築師』の序文に、新時代が鼓噪してかれの

周圍を通つて行くさまを書いたのは、文藝批評家の最も見通すことの出来ない面白い一つのシーンである。かれは巧に身を潮流の上に挺して、堤防の上からそれを見てゐるやうな態度を取つた。かれは飽くまで自己を忘れなかつた。又、眼前の潮流を批評し得るの餘裕を保つことを忘れなかつた。『スバル』が今の文壇にある異つた流れを注いだことは、誰も否むことが出来ない。『しがらみ草紙』時代の意氣は、今日にでも矢張かれの上に見ることが出来る。

これに比べると、早稻田の逍遙博士は、『群』の盟主である。決して『箇』ではない。かれの周圍には種々な人達の侍つてゐるのを私は常に見た。そしてその人達が博士を餘所に常に相争ふのを見た。そしてその人達の多くは、千朶木山房の主人に渴仰した若い群よりも、より多くの保護と世話を受けたに拘らず、その文壇に送つた新しい氣分は、むしろ千朶木に多く、早稻田に少いのを私は見た。

有名な没理想の論戰、あれが矢張兩者の區別をよく現してゐるのである。『しがらみ草紙』の彗星のごとく消え去つたのに比して、『早稲田文學』が丸で内容と勢力とが別種のものになつたとは言へ、今日までつゞいてゐる形なども面白いと思ふ。

それから、『帝國文學』と言ふ雑誌があつた。あれは何うしたらう？ 今もつづいて發刊されてゐるか、何うか、かう訊くと、或人が、それは矢張今でも發刊されてゐるが、丸で内容の變つたものになつて了つたといふことを話して呉れた。

『帝國文學』——赤門出身の若い人達の機關雜誌、これは最初はかなり賑やかであつた。樗牛、桂月、柳村(上田敏)などのゐる時分は、それでも是非毎月讀まなければならぬ雑誌であつた。『しからみ草紙』とその後身の『めざまし草』と『早稲田文學』とに對抗した形が面白かつた。無論その中から幾多の人才が出た。批評家は殊に多かつた。私にしろ、獨歩にしろ、よくその六號活字でわる口を言はれた。獨歩はよく怒つた。

『何だ、あいつ等は、卒業して田舎に行けば、文學のぶの字も忘れて了ふ奴等ぢやないか。そんな奴に批評が出来てたまるもんか。』

實際その通りで、此處から出て、大氣焔を吐いて、一二年で音も香もなくなつた人達は腐るほどある。豪い學者、乃至はすぐれた語學の先生になつたものはあるが、一生を文藝に託した人は數へるほどしかない。これもしかし大學の文科の方針がさうなのだから仕方がないではないが……。

この中で、樗牛と上田敏とのこの二氏は、私達に取つても考へなければならぬ人達だつた。樗牛の才筆は、世間では無論敏氏の上にその位置を置いてゐるが、私の考へでは、敏氏の方が寧ろ多く文壇に貢獻するところが多かつた。『樗牛全集の中には、別に大したものはないが、敏氏の書いたものの中には、當時にあつて、新しくすぐれたもの、若い人達をひき附けたものが非常に多かつた。新しい知識の輸入者としては、千代木山房の主人の次ぎに位する人と言つて差支なかつた。しかし敏氏は不幸にして人を

鼓吹する力の半分もその實行の力を持つてゐなかつた。實行に行くと、かれはいつも逡巡した。躊躇した。又よく傍觀した。

思ふに、自然主義に對抗した思想の中で、かれの抱いた思想が一番新しく且つ價值のあるものであつたに相違ない。私は常にかれを向うに廻した。私などの考へてゐる正面の對者は、實にかれでなければならなかつた。『藝苑』といふ雑誌の生れた時分には、殊に私はさういふ氣がした。

『明星』は晶子の天才のために光を放つたが、實は敏氏に負ふところが最も多かつたのである。海潮音の翻譯——あれなどは殊にさうだ。少くとも、あれは當時の讀者には、過寛の衣であつたに相違なかつた。私達はしかしそれに赴かうとはしなかつた。何故なら、もつと實際でなければならぬと思つたから、もつと徹底の寫生でなければならぬと思つたから、フランス文學以上にロシヤ文學の素朴と眞剣と無邪氣とを愛したから……。

電車以前の東京

其頃でもまだ東京には電車は出来てゐなかつた。馬車鐵道も大通に一條あるばかりで、交通は十の八九は、車に由らなければならなかつた。

私は博文館を出て、本町の角で、そこに待つてゐる車に乗つて、濠端を九段の下に出て、飯田町の坂

を上、牛込見附から神樂坂へと来て、そこで車を捨てて、今度は原町乃至若松町の自宅まで歩いて歩いた。

その路は私に取つて、かなりに思ひ出の多い路であつた。家庭に對する問題、妻子の將來についての問題、文壇にいつまでも出ることの出来ない問題、さういふ雑多の問題がつねに私を苦しませた。

私は私の書いたものの拙かつたため、又は交際が下手で、すぐ敵をつくり易かつたため、それに、何處か氣障なイヤなところがあつたため、常に文壇の人達からは、悪評ばかりを受けて來た。『めざまし草』以來、わる口は殆どきまり文句のやうに考へられて來た。

それに、月給が安いので、何うしても内職をしなければならなかつた。それに何方かと言へば、私は生活を氣にする方だ。國木田君のやうに、藝術を生活の上に超越させて置くことの出来ない方だ。従つて一夜漬けのやうなものをよく書いた。こんなものと思ひながら、仕方なしにそれを賣つて金にした。そして餘裕があると、外國の本を買つた。

その頃でも、東京は、私が最初に來た頃に比べると、夥しく變つて行つてゐたのであつた。市區改正は既にその八分を完成し、地下の水道も出來、家並なども非常に立派になつた。四五年前に出來た日比谷の公園も、その時は樹木が貧弱で、何だ、これでも公園かと思つたほどであつたが、その頃はもう立派な樹木の影の多い公園になつてゐた。戦地に行くことに決つた日、そこを通ると、梅が美しく空に際すやうに咲いてゐた。

若い人達の群

麴町の番町の英國公使館の裏通、そこに一軒さびしい小さな西洋料理店があつた。樹の影が多く、前は公使館の赤煉瓦の塀で、その先はだらだらとした低い坂になつてゐるのが見えた。

『西洋御料理、快樂亭』

白い青いペンキ塗の地に、黒くくつきりと書かれてあつた。

『あそこの主人はイギリス公使館のコックをしたことがあるんださうだ。だから旨い料理を食はせるよ。』

蒲原君がかう言つて、先に立つて、我々の會合を二三度其處で開いた。

有明君の家は、其頃、隼町の衛成病院の裏になつてゐるやうな處にあつた。『獨絃哀歌』『有明集』その頃の詩壇は、有明君の勢力の下にあると言つても好かつた。ロセツチ兄弟、プレラフアエライト派、スキンバアン、さういふ傾向を有明君は殊に好んでゐた。私達はよく隼町の家を訪問した。

社の歸りに、その西洋料理の扉を押して二階に上ると、

『ヤノ。』

東京の三十年

かう言つて、いつも有明君が肩を聳やかして迎へた。

『まだ誰も來ませんがね……。來るには來るんです。國木田君は無論來るし、柳田君も役所の歸りに寄ると言つたし、生田君からは返事は來てゐるから。』

『小栗君は？』

『返事はありませんがね。來ますよ、屹度。』かう言つて又肩を聳やかした。

少し待つてゐると、生田君がやがてやつて來た。大きな口の、元氣な、髪を綺麗にかけた、莞爾した顔で……。『富美子姫』などといふ作を書いて、新しい作家として、かなりに名聲が隆かつた。

『少女譜ツて言ふのを見ましたよ。相變らず少女宗ですね。何うも田山君の憧憬と來たらかなはん。』こんなことを言つて大きく笑つた。

背の低い、色の白い、元氣な小栗君、つゞいて精悍な顔をした國木田君、最後に、背の高いスツとした柳田君がすました態度で入つて來た。

卓を圍んで、盛んに面白い話が初まる。

あは、と蒲原君が大きく笑ふ。小栗君のY新聞に掲載してゐる『青春』の話などが出る。『矢張、僕の知つてゐる女に、毎朝樂みにして讀んでゐるものがありますよ。繁は何うなるんだのなんてきかれるので困るよ。』かう柳田君に油をかけられて小栗君は俄かに得意になる。『小栗は此頃は流行兒だからな……』

少し奢つても好いんだ。』かう傍から生田君がいつ。

葵山君は木曜會の同人だが、G社に近よつてゐたので、小栗君などには、中でも殊に親密である。

柳田君が泉君最眞で、その話をする、小栗君はそれがいくらか癢に觸るといふ風で、『泉なんか、何だ、あれは——あんなオオロマンチストがあつて堪るものか。全く空想ででつち上げるんだから。……』

ねえ、田山君、メイテルリンクなんかあんなもんですか。』

『丸で違ふね。』

『さうでせう。あんなもんが新らしくつては堪らない。』

さうかと思ふ、と國木田君は頻りに生田君に何か調戲ふ。と、生田君は大きな聲をあげて笑ふ。『君の作なんか猥褻とも……猥褻以上だ。發賣禁止を受けるのは當然だ。當然以上だ。』かう國木田君が言ふので、好人物の葵山君も終には躍氣となつて辯解する。

そこに、二品三品の西洋料理が運ばれる。フライ、カツレツ、ロオルキャベージ、さうした種類である。

『まづくないな。』

『いくらか違ふね。』

『それに、』かう言はれて有明君はいくらか得意になつて、『それに、場所が好いちやありませんか。ち

よつと世離れてゐる形が好い。パリイあたりにでもありさうな家ぢやありませんか。』

『さうだね、アルフォンス・ドオデエの追憶記の中の一節にでもありさうだね。』

かう柳田君が言ふ。

小栗君は、『此間、Kが書いてゐたドイツ文學の中のズウデルマンの小説、あの新舊思想の衝突、いゝところをねらつたもんですね。あゝいふ處を書かなければ駄目だ。田山君は持つてゐますか。』

『持つてゐる。』

『話してきかせたまへな。』

私は話が下手なので、柳田君が代つて話す。それがすむと、今度は詩の話がその中心になる。ゾルフアレン、ベルレーヌ、ボウドレイル——それも多くは其頃上田君が、『海潮音』といふ見出しで、翻譯して、『明星』に出してゐるのを本にして話してゐるので、有明君もまだその英譯すら持つてゐなかつた。それから話がツルゲネフからトルストイになる。モウパッサンになる。文壇の話になる。國木田君の鋭い皮肉と柳田君の激昂した調子と生田君の快活な笑聲とが一間に賑やかに溢れ漲る。明るい瓦斯が青白い光線であたりを照してゐる。

誰の顔にも若い血が漲り、『何か仕事をしなければならぬ』といふ熱情が限りなく溢れてゐる。

氣が附くと、生田君がこりずに、女の惚氣か何かを言つて、國木田君にひやかされてゐる。柳田君は

柳田君で、小栗君をつかまへて何か頻りに話してゐる。

『生田君は、愛嬌がある。先生が來ないと、會がさびしいや。』

歸りながら、私達はこんなことを言つて笑つた。小栗君と生田君とは、いつも二人で女の許に行つて了ふ。そこで私達は三四度會をした。これが後の龍土會の始めだ。

上田敏氏

上田敏氏は、鷗外漁史につゞいて、海外の文藝を最も多く日本の文壇に鼓吹した一人だ。才のある、氣のきいた、上品な、所謂幽麗典雅の文を書く人で、高く時流の上に超越するといふ風があつた。

樗牛に比べると、純文藝の方では、無論この人が上だ。樗牛は通俗ではあるが、また熱には富んではあるが、決して敏氏ほど深く外國文藝に通じてゐなかつた。

しかし上田君はよく氣障だと言はれた。いやにすます奴だと言はれた。それは例の貴族的なところが招いた世評であらう。しかし上田君にも、學者生活、學校生活がその持つた本當の藝術を出させずに終らせたやうなところがある。惜しいと思ふ。

私は上田君には、前に言つた『文學界』の新年の會に逢つたのが初めて、其後は餘り深く交際しなかつた。時々逢つても、『やア』と挨拶する位に留つてゐた。

それに、『明星』に上田君が近寄つてから、一層縁が遠くなつた。『明星』は當時にあつては非常に大きな影響を文學青年に與へた。雑誌としても好い雑誌であつた。日本の雑誌がそのために影響されて、コマ繪をつかつたり體裁を改めたりしたことも尠くない。しかし與謝野氏とは、私は初めから氣が合はなかつた。『東西南北』時代から合はなかつた。その癖、別に交際したわけでもない。顔も二三度會つて知つてゐる位のものである。

しかし晶子女史の歌には、流石に、私も感服させられた。『亂れ髪』それからつゞいて出た歌集あたりには、現に、私が暗誦して時々口にして吟じて見るやうなものもある位だ。晶子女史はたしかに一葉以後の女の天才だ。

『明星』に『海潮音』が載せられたことは、むしろ奇蹟である。上田君は少くとも十年位時代に先んじて進んでゐたのである。つまりあの時分の詩境には、『海潮音』は過寛の衣であつたのである。

キイツ、シエレイ、ウォルズウオルス、それからロセツチ、これから一足飛にエルフアレンに飛ばうとしたのである。詩壇の人が眞にそれを飲み込むことが出来なかつたのは、無理もない。

上田君はゾラが嫌ひであつた。ナチュラリズムの中では、かれはゾラよりもドオデエを選んだ。モウパッサンも賞めてはゐるが、それはその藝術的な明るいところを取つたので、深い内部までは入つて行かなかつた。ロシアの文藝などでも暗い方面よりは、何方かと言へば、明るい方面を好んだ。飽まで『晩

近派』で『清新派』であつた。

つまり深い暗いところに入つて行くことを餘り好まず、又たとへ深い暗いものでも、一度藝術といふ貴族的の衣を着せたものでなければ、上田君にはびつたりと合はないやうなところがあつた。これが上田君の卅八九年後に起つた自然主義運動に慚らなかつたところであらうと思ふ。

それに、これは私の考へではなく、その門下生の一人の話だが、上田君には鼓吹する力はあつても、何か實行する力が不足であつたといふことである。『先生は、鼓吹する時には、中々熱があるんです。やれ、やれツて言ふんです。しかし、いざとなると、いつでも超然として了ふ。學校といふこともあつたのでせうが、何うもそこが煮え切れませんでした。』かう其人は言つた。

世評の所謂デレツタンチズムはさういふところを指して言ふのであらうと思ふ。

しかし上田君は、その持つてゐたものを何うかして出したいと常に思つてゐたには相違なかつた。私などの考へでも、上田君の持つた思想なり傾向なりが、到底私とは合はないのは知れてゐるが、隠然一敵國であつたことは事實であつた。

上田君の趣味は、江戸趣味に於て、紅葉山人に合つた。それから又小栗風葉氏の絢爛な文章に合つた。後に、永井荷風に合つたのも矢張それで、通俗、賤卑、民衆、さういふものと常に相容れなかつたやうな形を存してゐる。氏は曾て『藝苑』といふ雑誌を公けにした。森田君生田長江君などがその子分で、

氏の藝術觀と藝術趣味とは遺憾なくそこに顯はれてゐた。生田長江氏の『小栗風葉論』といふのがそれに載つてゐるが、これなどは殊に膚淺で、外國の作物を風葉の作に比したあたりなどは、今日見たら、顔を赧くせずにはゐられまいと思ふ。

しかし、上田君の藝術味は、卅八九年に起つた自然主義運動に取つては、確かに一敵國であつたので、その唱道が盛んになる曉には、私達は、もつとそれに對抗しなければならぬといふ覺悟を持つてゐた。しかし惜しいことには、『藝苑』は一年ほどで潰れた。

今日でも、生田君、森田君などの自然主義觀が、いくらか上田君の趣味の感化を受けてゐるのは止むを得ないことだ。それに、『明星』からの系統もいくらか引いてゐるやうなところがある。

二階の一階

S書店の二階の一階、そこに私は導かれて行つた。S書店と言へば、紅葉以來の文壇の權威で、其處で發行する書籍の装釘の美しいこと、口繪の綺麗なこと、紙の好いことなどは、讀書社會に評判であつた。そこに、一文學書生である私は、書けないために擒になつてゐる川上眉山君を訪ねた。

何でも春の二三月の頃のことであつたらうと思ふ、私は變に改つたやうな氣がした。私は前の年の十一月頃から『夕霜』といふ五十回ばかりの小説をY新聞に載せた。ことに由つたら、それをそこから單

行本にして貰ひたいと思つた。

川上君は、

『や。』

と、私を迎へた。

この日當りの好い六疊の一階、こゝは既にいろいろな文士が書けないので擒になつて一週間も二週間もゐたので評判になつてゐる室であつた。抱一庵、正太夫も擒になつたことがあつた。そしてそれがいつも噂に上つた。その擒になつたことさへまだ世に出ない私達に取つては羨しく珍しかった。

『また眉山が擒になつてるとよ。』

かうG社の同人は噂した。

で、私は一面好奇心も手傳つて、そして訪ねて行つたのであつた。

川上君はざろりとした扮装をして、貴公子然たる風をして、紫檀か何かの机に向つてゐた。たしか『暗潮』の後篇を書かせられてゐた。

『書けますか。』

『いや……駄目だね。』

『でも、お書きになつてゐるんでせう。』

『書いてゐるがね。』

かう言つて座蒲團を私に勧めた。手を鳴すと、下から女中が茶や菓子を運んで来た。

私が『夕霜』の話をすると、

『やア。』

かう言つて首を傾けて、『何でも、誰かのをやつて、餘り好成绩でなかつたつて言ふから、何と言ふかな……』又考へて、『しかし、折を見て話しては置かう。……なアに、君なんか、今に煩さくなるほど本屋が頼みに来るよ。今一辛抱ですよ。』

宜しく頼んで、『でも、此處だと、又、家にゐると違つて、是非書かなければならないと思ふから、書けるでせう。』

『矢張駄目だね。誘惑物が多いから……。やれ友達が来て、晝飯を食ひに行かうの何のツて……。それに、寄席なんかもあるし、何處に行つても面白いものばかりだからね。』

『さうですかね。』

『でも、前に、いろいろな人が来て書かせられたところですね。』

川上君は笑つて、『かういふ處に来て書くのは、餘り名譽にはならんよ。』

『紅葉さんも来たことがあるんですか。』

『横寺は来はしないがね。随分厄介になつた人があるんだよ。』

唯それきりで、一時間ほど話して歸つて来たが、それでも、さうした下町の書店の二階の間と、川上君のぞろりとした姿とがびつたりよく調和してゐたので、それに聯關して、其處等にある下町娘や、女や、歡樂やを私は頭に描いた。夜は矢張書いてゐるのかしら……。さうぢやあるまい。何處かに出かけて行くのだらう。料理屋もその近所に澤山ある。藝妓もゐる。待合もある。と、まだよくわからない文壇の大家のだらけた生活などが空に描かれて、自分一人、意氣地なくすぶつて暮してゐるのが惨めに思はれた。

今でも、……それから二十年も経つた今でも、矢張、その二階の一間に文士が擒にされると思ふと、私は不思議な氣がした。

つい此間行つた時にもその話が出て、『さうですかね。さうすると、この二階も中々由緒があるんですね。保存して置く價值がありますね。』などと言つて笑つた。

私のアンナ・マール

博文館の應接間に、YK君が来て、九月の『新小説』に是非巻頭の小説を一篇書けといふことであつた。

紙數百二十枚内外……。

それは戦争から歸つて來た翌々年、戦争のすつかり了つた翌年であつた。償金は取れなかつたが、社會は戦勝の影響で、すべて生々として活氣を帯びてゐた。文壇も、もう島崎君の『破戒』が出て、非常に喝采を博し、國木田君の『獨歩集』も漸く世に認められて、再版三版の好況を呈した。『やうやく我々の時代になつて來さうだぞ。』かう國木田君は笑ひながら言つた。

私は一人取残されたやうな氣がした。戦争には行つて來たが、作としてはまだ何もしてゐない。小諸から出て來て、大久保の郊外で、トタン屋根の熱い下で、袒で島崎君が努力した形などを見て知つてゐるので、殊に堪らない。何か書かなくちやならない。かう思つて絶えず路を歩いてゐても、何も書けない。私は半ば失望し、半ば焦燥した。

處へ『新小説』から頼みに來た。

『書いて見ませう。』

私は息込んで言つた。

私は今度こそ全力を挙げなければならぬと思つた。社へ往復の途中、新たに開けた郊外の泥濘深い路を、長靴が何かで、いかに深く製作のことに就いて頭を悩ましたであらう。あれでもない。これでもない。かういふ風に考へては打消し、打消しては考へた。

丁度其頃私の頭と體とを深く動かしてゐたのは、ゲルハルト・ハウプトマンの“Einsame Menschen”であつた。フォケラアトの孤獨は私の孤獨のやうな氣がしてゐた。それに、家庭に對しても、事業に對しても、今までの型を破壊して、何か新しい路を開かなければならなかつた。幸ひにして私は外國——殊に歐洲の新思潮を、歪みなりにも多い讀書から得て來てゐた。トルストイ、イブセン、ストリンドベルヒ、ニイチエ、さういふ人達の思想にも、世紀末の苦艱の形が、名残なくあらはれてゐるやうな氣がした。私も苦しい道を歩きたいと思つた。世間に對して戦ふと共に自己に對しても勇敢に戦はうと思つた。かくして置いたもの、壅蔽して置いたもの、それと打明けては自己の精神も破壊されるかと思はれるやうなもの、さういふものをも開いて出して見ようと思つた。

私は二三年前——日露戦争の始まる年の春から惱まされてゐた私のアンナ・マアルを書かうと決心した。

私はその前年の十一月に、代々木の郊外に新居をつくつた。それも何うかして、靜かに自分の心を纏め、且つ本當の仕事を爲すためであつた。社に行つてゐる時間は仕方がないが、歸つてからまでも、來客——ことにつまらない雜談好きの來客に妨げらるゝに堪へない。何うかそれを免れたい。さう思つて、郊外の畑の中に、一軒ほつつりとその新居を構へた。朝の白い霜、遠くにきこえる市聲、場末の町の乗合馬車の喇叭の音、霜解のわるい路、それでも私は靜かに社から歸つて後の時間を書齋に過すことを得

たのを喜んだ。

私のアンナ・マアルは其時故郷の山の中に歸つてゐた。私はそれをその前の年の秋に、旅行の途次訪問した。私の心の中のかの女の影は愈濃かになつた。書かうか。書けばその戀をすっかり破つて棄てることを覺悟しなければならぬ。書くまいか、そしてその戀の時機の來るのを待たうか。

長い間この二途に迷つてゐたが、『新小説』への約束の期限と、何かしつかりしたものを書かなくてはならなくなつたハメと、新しい機運の動いて來てゐるのが、私にそれを書かせるべく決心させた。

それは七月の末であつた。もうそろそろ暑くなつて、裏庭の梧桐の葉がさがさと朝夕の風に動いた。新緑は既に深く、雨は時には窓を暗くした。晴れた日には、遅い霧島の躑躅が眼を射るやうに赤く日にかゝやいた。私は座敷に机を据ゑて書き始めた。

朝は早く起きて十時まで机に向つた。社から歸つて來たあとは、また机に向つて、夜遅くまで灯が書齋を明るくした。十日ほどで脱稿した。

何だか手答があつたやうな氣がしたが、別にそれほど評判を惹き起さうなどとも思はなかつた。それに『これが出たら……もしこれをかの女が讀んだら』かういふ思が私の心を暗くした。耻しい、きまりがわるいやうな氣がして、原稿は出來ても、まだ『新小説』へ渡さずに置いた。

題も旨くつかなかつた。『戀と戀』とが一番好いが、それは既に天外氏の作にさういふ題があるので、

重ねてつけるのもいやだ。題で又一日二日經つた。と、『新小説』の主筆のG氏から社へ電話がかゝつた。

『出來てゐます。』

『ルビは振つてあるでせうな。』

『え。』

『題は？』

『蒲團。』その朝途中で考へた題をつい言つて了つた。

『フトン？』

先方では一寸わからぬやうなので、

『あの寝る蒲團のフトンです。』

『さう、蒲團……なら明日取りに上げますから……。』

で、愈々原稿を渡すことになつた。仕方がないと思つた。そしてその翌日は原稿を持つて來て渡した。九月の『新小説』に載つたその作は、不思議に世間の評判に上つた。一番先に、小栗君が『君の眞の才を見たやうな氣がした。』と言つてよこした。あちこちでも何の彼のと言つて批評した。机を並べてゐた前田君は『讀みましたよ。』と言つて、變な不思議な表情をして私の顔を見た。そればかりではなかつ

た、やがて山の中のアンナ・マアルから悲しむやうな泣きたいやうな腹立しいやうな手紙が来た。

私は重々すまないやうな気がして、詫びを言ふやうな手紙を書いた。

ところが、その作がエポックメイキングだとか、自然主義の主張の肉と血だとか何とか言はれて、文壇の問題となつた。いくらか反対の側に立つてゐる『明星』では、半ば嘲笑的半ば反抗的の合評をした。『早稻田文學』の合評では評判が好かつた。吉井勇君がロオマ字か何かで罵倒に近い詩を『明星』に公にしたのもその多い批評の一異色であつた。

私の親友達のグループでは、柳田君は『あらずもがな』といふ顔をして、それについては何一言も言はなかつた。生田葵山氏は、『矢張甘いよ、』などと言つて笑つた。島崎君からも何の批評をも得ることが出来なかつた。國木田君も餘りそれについては何も言はなかつたが、龍土會の席上か何かで、誰かの批評に對して、『だつて、甘いたつて仕方がないさ。花袋君の戀はあゝいふ戀なんだから、兎に角、甘くつても何でも、徹底だけはしてるサ。』こんなことを言つた。

それから言ふのを忘れたが、私はその『蒲團』の校正を日光の山内の僧房の中でした。その年の八月は、私は若い姪をつれて、十五日ほどそこに避暑に行つた。私は二三年前にその題材を得た『田舎教師』を何うかして少しでも好いから、書き出して見たいと思つて行つた。しかし、遂にそれは書けなかつた。『蒲團』の校正は、僧房の中でした。と、若い主僧はそれをめづらしがつて、是非讀んできかせよといふ。その一部を私は姪と主僧とに讀んだ。

『惜しいことをしたな、あの原稿、捨て、了つたんですかな。取つて置けば宜かつた。それこそ寶だつたがな。』今でも主僧はこんなことを言つた。

龍 土 會

麻布龍土町の龍土軒で會を開いたので、龍土會といふ名が出来た。

そこはフランス料理が旨いといふことで、最初は畫家の連中が行つた。そこは、今とは違つて、小さな家で、一間か二間しかない位で、和田、岡田、中澤、久米などといふ人の洋畫が澤山にかゝつてゐた。ちよつと靜かな好い家であつた。

誰が一番先にそこに行つたか。恐らく蒲原有明君か、でなければ平塚篤君か。この二人の中であると思ふ。そして二人が國木田君を其處に引張つて行つた。

その料理の旨いまづいもあつたらうが、それよりも、フランス料理といふことが、若い私達の興味を惹いたので、そこで最初に、會をした時は、何でも蒲原君が幹事で、その獻立には風骨會と書いてあつたと覺えてゐる。そして紅葉山人の柊とか、明星の晶子とかいふ題で、いろ／＼な料理が出て笑つたことがあつたのを覺えてゐる。兎に角、英國公使館の裏あたりで毎月一度、隔月一度位にやつた會が段々其

處に持つて行かれることとなつた。

この會では、最初は國木田君がその中心であつた。つゞいて、柳田君がやつて来て例の巧い談話をして人々を喜ばせた。柳田君はパウ・ブルジエの“Pastel of man”と“Portrait of women”の中の話などをしてきかせた。

小山内君と、その時分多少物を書いた小島といふ豫備少尉と、女のことで鞘當てをして、小島君がえらい劍幕で小山内君に喰つてかゝつたことなどもあつた。その時、柳田君が憤激して、『何んなことがあつたかそれは知らないが、兎に角、この會は僕等の會だ。こゝで、そんなことを持ち出すのはよして貰はう。』かう言つて、小山内君をかばつた光景は、今だに私の眼の前にある。小山内君はやさしい鳩のやうな態度で、顔を眞赤にしてゐた。

小島君は肥つた大きな人で、外國語學校出身で、フランス語に長じて、シャトウブリアンのルネなどを愛讀してゐた。

中澤臨川君は、國木田君が伴れて來た。『藝華集』などといふ著書があつて、批評にかけては我々の間に尊敬されてゐる人だつた。おとなしい沈黙勝の人で、胸に萬斛の情熱を藏しながら、別に際立つてさういふところを見せなかつた。常に莞爾してゐた。柳田君に紹介すると、『面白い人だ。工學士であゝいふ人があるとは面白い。何とも言はれない好い處がある人だね。』と言つた。

岩野君と蒲原君との笑聲は、妙くとも會での異彩であつたに相違なかつた。二人は大抵はやつて來てゐた。

『我々龍土會からも、フランスあたりに行くものがありさうなもんだな。その時は、うんと盛んな送別會をしようぢやないか。』こんなことを國木田君は言つた。それほど我々は外國の文學にあこがれてゐた。小栗君も來た。生田君もよくやつて來ては大きな聲で笑つた。島崎君も小諸から來て、『破戒』を出した時分からやつて來たが、後には——國木田君がゐなくなつた頃には、會でも常に待たるゝ人となつてゐた。

その時分は、龍土軒は既に今の新築の洋館になつてゐて、あの茶屋上りらしい細君がいろいろチャホヤするやうになつてゐた。自然派の文藝は、龍土會から生れたなどと世間から言はれたので、後には、雑誌記者、新聞記者なども多くやつて來て、二十五六人の大きな會になつたことも妙くなかつた。

その時分には、片上、前田、吉江君などといふ人達も入つて來た、戸川秋骨君も來た。今は政治家で、會では内閣書記官長であつた江木翼君などもやつて來た。

後に、島崎君が、『まだあの頃は若かつたね、麻布くんだりまで押かけて行つたんだからね。』などと笑つた。

龍土會は大會を柳橋で開くやうになつてから、段々衰へて行つた。

獨歩の死

停車場を下りて、昔の宿場の名残の残つてゐる町を通つて、それから汽車の踏切を越えると、ホブラで囲まれた小學校があつた。松原がそこにも此處にも見えて、富士の白雪が寒く日にかやき渡つた。半は松原、半は畠、處々に瀟洒な別荘や藁葺屋根や漁師の家や、さういふもののある中をうねうね曲つて通じてゐる路を、私は度々通つて行つた。

國木田君は、明治四十二年の二月から、相模の茅ヶ崎の南湖院にその病を養つてゐた。

私は何とも言はれない感慨に撲たれながらその路を通つて行つた。折角世にその才を認められたかれ、新機運の唯中に立つてゐるかれ、『獨歩集』『運命』が版に版をかさねるやうになつたかれ、そのかれがかうして不治の病にかゝらうとは！ 私は一番深く國木田君と爾汝相許した仲なので、それを思ふと悲痛の涙に咽ばずにはゐられなかつた。私はその時『生』をY新聞に載せてゐたが、三四回餘裕が出来ると、いつもそこに行つて、かれを見舞つた。

一番最初にかれを見舞つた一夜が、今でもありありと私の胸に浮んで来る。私はそれを『縁』の中に書いた。しかし、思ひ出せば出すほど何遍も書きたくなるのがその光景である。かれは別室の海に近い一間に寢臺を横へて寝てゐたが、そこに、夫人とお君さんとが常に代り／＼にその看護をしてゐた。お

君さんと言ふ人は、かれの最後の愛人である。何處かの看護婦で、芝のかれの家に看護に来てゐる中に出来たのだが、友人間でいろいろなことを言ふに拘らず、私は前からその戀愛を是認してゐるやうな形を取つてゐた。お君さんが最後まで垂死のかれを看病したといふことだけでも——それは夫人との意地の争ひであつたかも知れないが——私はお君さんの愛がかれのの上にあつたといふことを思はずには居られない。お信さんのやうな女に苦しんだかれが、最後の床に、さういふ女性を引つけてゐたといふことは、寧ろかれの生涯を藝術的に色彩づけたことではないか。

丁度其頃は西風の吹く頃で、砂塵は凄しくかれのゐる室の窓を打つた。——棚——そこには藥瓶だの何か、載せてあつて、こつちの一疊半ほどのところには、火鉢が置いてある。そこで私は國木田君と種の話をするのであつた。

新機運は我々の藝術を容れて來たのと、國木田君が新聞記者に多い知己を持つてゐるのとで、東京の新聞は常にその病狀を紙上で報じてゐて、國木田獨歩の名は一世に高いといふ趣があつた。新潮社の佐藤君は、丁度その頃、かれの病床に贈る『二十八人集』の出版の計畫をしてゐた。

その盛んな名聲とさびしい病床とは、好い對照をなしてゐた。私達はそこでも文藝の話をおかすにした。

日暮近く、歸るといふのを、

『是非、泊つて行つて呉れ。』

と言ふので、私もその氣になつて、お君さんに、近所にある宿屋まで案内して貰つた。私とお君さんとは、長い病院の廊下を黙つて歩いた。私は國木田君とお君さんとの情事を聞きたいと思つたが、しかしそれを言ひ出すわけにも行かなかつた。お君さんの姿は、夫人に比ぶれば、何處か瀟洒な、意氣な、成るほど男に好かれさうなところを持つてゐた。長い廊下にはところ／＼灯がついてゐた。

『お待ちなさい。』

お君さんはかう言つて、自分の履物をさがして、病院の入口のところから、松原の中を私の前に立つた。

『遠いんですか。』

『いえ、すぐそこです。』

かう言つたが、言葉をついで『七八町行くと、この先に、I館といふ大きな旅館があるんですけれど……。こゝは、それは小さな旅籠屋なんです。病院に来て、遅くなつた人が泊るやうな處なんです。』海近い三月の夜の空氣と、梅などの雑つて咲いてゐる松原の静かな音とが、私に何とも言はれないロマンチックの感を起させた。『こゝですよ。』と言つてお君さんの指した旅籠屋が、普通の家と少しも違つてゐない茅葺であるのなども私に詩的な心持を持たせた。

『面白い旅籠屋ですね。』

『旅籠屋と言つても、名ばかりなんですもの。』

かう言つて、お君さんは先に立つて、前に通じて置いた話をして呉れると、小間使らしい小さな女が私を奥の一間へとつれて行くのであつた。丁度月の夜で、松の影の濃淡に織り出された向うに、砂山があつて、又その向うから波の音が靜かにきこえて來た。私はロマンチックな興に催されて、鱒の糞附か何かで、酒を一本つけて飲んだ。夜は終夜松の音が枕の上にあつた。

國木田君の夫人は、子供を伴れて、その旅館のすぐ向うの松原の中の小さい三間ほどの家を借りて、そこからお君さんと代る代るに、病院の方へ看護にと出かけるのであつた。松林に添つて、小さな鞆鞆があつて、男の兒と女の兒とがそれに乗つてゐるのが小さく悲しく此方から見えた。

六歳位の男の兒が、一人で、近道をして、松原の中を通つて、さびしく父の病室に訪れて行くのを見た時には、私は涙の胸に満ちて來るのを覺えた。モスリンの被布を着た女の兒の姿もさびしかつた。

私はその病院近い松原と海とに對して、今でもいろいろな印象を持つてゐる。私は一人で來たこともあれば、友達と一緒にやつて來たこともある。眞山青果君が、實際國木田君を崇拜してか、それとも廣告的にこの垂死の病人をつかはうとしたか、それは何方だか知らないが、尠くとも、眞山君は私が最初に頼まれて行つて國木田君に逢はせたのであつた。ところが、眞山君は一度歸つて、それから出直

して来て、病院を度々見舞つて世話して呉れた。

此處で、その時のことを、中村星湖氏の書いた『かれ等は踊る』の真相を解さうとするには、私は少しく深く入つて話さなければならぬ。その時分、小栗君の周圍に、所謂戸塚黨なるものがあつた。思ふに、小栗君は、この新機運動興の時代に際して、その勢力と位置とを墮さないために苦しんだであらう。従つて國木田君——垂死の國木田君を自分の勢力圏中に入れて置くことの必要を感じたであらう。眞山君はそれを知つてか、又は知らずしてか、又はかれ自身も小栗君と同じやうな考へを抱いたか、かれ等は突然入つて来て、そして親友のグルウブをも脇にやるやうな形を取つた。これと言ふのも『二十八人集』の編輯が、當時戸塚黨に最も近かつた新潮社から發刊される運びになつたからであらう。私は後には眞山君を國木田君に逢はせたことを悔いた。

それから、もう一つ。小栗君や眞山君は私をもその黨派の中へ引入れやうとしたらしかつた。しかし私は友人としては小栗君は昔から知つてゐるが、文學上の友としては、嫌らなく思ふことが非常に多かつた。それに、硯友社の人達の遺物のやうな駄洒落、不眞面目な落書、垂死の病人に對しても、『何うせ、もうあいつは長いことはないんだ。』といふやうな輕佻な態度、さういふ態度がイヤだつた。病人を慰めるために、さういふ不眞面目な落書などを書いたと言ふことが、それが私にはイヤであつた。前田君がそれに腹を立て、茅ヶ崎館に泊らずに、をりから見舞に來た岩野、正宗二氏と、私と一緒にわざ／＼國

府津に行つて泊つたのも無理はなかつた。戸塚黨の人達は、其時、大勢茅ヶ崎館に泊つてゐたから……。

それに、正宗君と眞山君との對照も、又その時の勘定に入れて置かなければいけない。何はさておき、小栗、眞山の兩君がいやにこだはつて來るのが、私にはイヤだつた。それに、小栗君は何ぞと言ふと、私を冷笑したり何かした。それに、私も、カ一杯の『生』を書きつゝあつたので、何となく氣分が焦々してゐた。

しかし、茅ヶ崎館にも、わるい思ひ出ばかりではなかつた。ある日は、小栗君と小杉未醒君と落合つて、三人して、濱を越して茅ヶ崎館へ行つた。三月の末はまだ寒いので、室といふ室はしめられて、私達はさびしい暗い廊下を通つて行つた。そこで靜かに過した夜の興は忘れられなかつた。

そんなことがその周圍にあるとも知らずに、國木田君は日に日にわるくなつて行くのであつた。多くの友達は、竹葉の鰻を持つて來たり、牛肉のヒレを買つて土産にしたりした。『死ぬなら死ぬので好いが、何うかして、もう一度新橋で下りたい。そして死にたい。』こんなことを國木田君は言つた。眞山君の書いた『獨歩の近況を報ずるの書』は絶えず『新聞紙上に載せられた。』

その病室の入口のところ、國木田君を眞中にして、大勢して撮影した寫眞がある。その時の状態は、『かれ等は踊る』の中にも書いてあるが、あれは私と前田君が、一度國木田君を撮影して置かうと言つて、そして社の寫眞部の人を伴れて、わざ／＼出かけて行つたのであつた。ところが、落書一件で、前

田君も私も不愉快で、其夜は國府津へ行つて泊り、そのあくる日、歸つて来て、そして撮影した。

中村君、相馬君などは、その夜茅ヶ崎館に泊つた。

あの時は國木田君はもうかなり病氣が重かつた。寢臺から起上ることも、歩くことも出来ないで、お君さんと夫人とが起したり負つたりして伴れて行つた。さまざまの記念の残つたあの寫真だ。

私は『生』の原稿のたまるのを待つては、よく病院へ出かけて行つた。後には成るだけ私とかれとの眞の悲哀を味ひたいと思つてひとりで出かけた。四月には、松原の間に花が咲き、菜の花は黄く、麥は青く、桃の紅なども雜つて、あたりはインプレツシヨニストの繪のやうな光景を呈した。

鯨の開いたのが道端の漁師の家の臥席の上に並べられて、それに麗らかな美しい春の日がさした。

海は霞んで、烏帽子岩を掠めた帆は、靜かに靜かに動いた。

『何うも困りましたな。』

夫人に泣きつかれては、私はいつもかう言ふより他に仕方がなかつた。

四月は五月になり、五月は六月になつた。長い梅雨が始まつた。私は机に向つて、『生』の筆を動かしながら、いつもさびしい海岸の病室を頭に描いた。

國木田君とは、私は喧嘩をしたこともある。『なんだ、あんな奴！ あんなちよこ才な！』かう思つたことも度々ある。それに、原稿の世話も煩さくつて仕方がなかつた。私が博文館にゐるので、『是非世話

をしろ。』とか何とか言つて来るが、不幸にして、社の主幹の坪谷君が、市政のこととか何かで、國木田君を一時目の敵のやうにしてゐたので、『國木田なんか、仕方がない。』かう言つて、私の持つて行く原稿をつき返した。中に挾つて弱つたことも一度や二度ではなかつた。しかし、國木田君は何と言つても私に取つて畏友であり又親友であつた。逢つて話せば、何んな感情の齟齬もすぐ除れた。それなのに……もう何うしてもわかれなければならないと思ふと、堪らなく胸がつかへて、寢臺の上の蒼い瘦せた顔がありありと眼に映つた。

それに、其頃は『生』が難かしいので、常に頭を焦々させた。世に認められるにつれて敵も段々多くなつて行つた。それに對しても勇しく戦はなければならなかつた。その時に際して、力と頼む親友の死期の近づいたのは、何んなに私を心細く思はせたであらう。

梅雨が晴れた。丁度其時分、私のアンナ・マアルが再び山の中から来て私の家に寓することになつた。私の周圍にも、去年兄が死んでから、種々な雑事が多く集つて來た。

『何うだらう。わるいだらうな。一度行きたいな。』

かう思ひ思ひ、自分にかまけてゐると、ある日、茅ヶ崎からかれの自筆で端書が來た。是非一度逢つて話したいからすぐやつて來て呉れと言ふのであつた。その日、餘程行かうと思つたが、行けばかれの臨終に逢ふことも出來たのであつたが、『生』が一日分しかやつてないので、其夜二回書いて、そして

翌朝は早く出掛けようと決心した。そして其夜は遅くまで机に向つた。寝たのは十一時すぎであつた。と、夜中に電報が来て、前の門を烈しく叩いた。妻が取りに行つたが、それは國木田君の死を報じた電報であつた。『あ、たうとういけなかつたか。残念だつた。今日行けば好かつた！』かう言つて、私は茫然として立盡した。

あくる朝は早く出かけた。新橋で齋藤弔花氏の夫人と一緒になつた。新聞にはもうその死が報ぜられてあつた。

私が行つた時には、遺骸はもう松原の中の家へと運ばれて來てゐた。夫人の涙、お君さんの涙、それは此處に繰返すまでもない。國木田君はひどく瘦せて骨と皮ばかりになつて、顔を向うに向けて、やさしい顔をして死んでゐた。

『君、僕は今日つくづく死といふことを考へたよ。天死も長壽も五十歩百歩だ。これから五十年後には、君だつて、この世の中にもゐないんだからな。』

かう言つて大久保で痛感して言つたかれの言葉が思ひ出されて、種々のことが考へられた。戀に苦しみ、又今死に捉はれたかれの薄侍の生涯が、詩人として相應はしい色彩と悲哀とを持つて私に迫つて來た。家の中はまだ靜かであつた。松原には、梅雨あがりの明るい日影がさし透つて、波の音が微かに聞えた。私は其處に眞山君や小栗君達がるずに、ひとり靜かに死者を思ふことを得たのを喜んだ。私はかう

いふ歌を詠んでかれの靈に手向けた。『梅雨ばれのわらやの軒の日に干せる繭しろき日を君が喪にゐし』實際、かうして、かういふ海近い松原の中に君の喪に侍さうとは私はいつ思つたであらうか。

其處へ、徳富蘇峰君がやつて來た。君は今朝の新聞を見て、逸早く飛んでやつて來られたのであつた。蘇峰君と國木田君の關係は師弟とも言ふべきものであつた。國木田君は蘇峰君の世話に非常になつた。かれの文藝的生活の一半は君の斡旋に待つたことが少くなかつたのである。お信さんとの戀愛事件についても、かれは蘇峰君の世話に一方ならすなつた。その蘇峰君がかうして早く弔つて呉れたのは、私にも何よりも嬉しかつた。

『あゝ、かうなつたか。何うも仕方がない、何うも仕方がない。故人は我儘だつたが、えらい處があつた。』かう言つて、蘇峰君は國民新聞時代の話などをした。

夫人だのお君さんだの弔花夫人だのは、野に咲いてゐる花を澤山に採つて來て、そして棺の中のかれの體を埋めるやうにした。

お君さんの涙は棺の中に落ちた。

午後からは、弔客が非常に多く東京から來た。田舎で死んで、そしてあれほど多くの弔客を集めたものは澤山あるまい。文學者、新聞記者、雜誌記者、家の周圍はすべてさういふ人達で一杯になつた。私は新聞記者に呼び出されて松原の中で、かれの話を何人かにした。

夜になつてから、私達は棺について、それを茅ヶ崎のレイルの向うの六本松の焼場で焼いた。

その夜の茅ヶ崎館の光景は、中村星湖氏の『かれ等は踊る』の中に書いてあつた。何故、私がさうした亂暴の態度をしたかと言ふに、それは矢張、小栗君、眞山君等の不眞面目な執つこい態度に激したためである。もう一つは餘りに周囲が煩さく私を苦めたからである。私はかへすがへすも、眞山君を國木田君に逢はせたことを悔いた。そして、中澤君、柳田君、吉江君、沼波君などの眞面目な友人に負くやうな形に陥れられて行つたことを耻ぢた。私は一人で國木田君のことを考へたかつた。

『國木田君は、死花が咲いたな。』

かう人々は言つた。

實際さうだ。新聞は、どの新聞でも、二段三段を割いてその記事をかゝけた。

新機運、新運動、さういふものがかれの死の周囲で花々しく踊つて見せた。

眉山の死

眉山君は追跡狂になやまされてゐたに相違なかつた。無論、生活上の煩悶もあつたに相違ない。しかし單に生活難で自殺したのでは決してない。

新運動に對する眉山君の位置は、辛い苦しいものであつた。かれの全盛期は、紅葉の晩年、『暗潮』な

どを書いた、『眉山紅葉を渡ぐ』時代であつたが、割合に早く新思想にふれて、硯友社同人の中で、一番新しい考へを抱いてゐたかれは、その時分から既に深い文學上の煩悶と懊惱とをつゞけてゐたのであつた。眉山君は其頃、既に『文學界』の人達と交を訂してゐた。二葉亭四迷氏をも知つてゐた。高瀬文淵とも往來してゐた。

眉山君は常に新しい外國の小説を讀んでゐた。バルザック、ドオデエ、ゾラ、進んではダマンチオあたりまで行つた。『暗潮』を途中で止して、新規時直しをやるのだと稱して、逗子から三浦半島を放浪した時には、殊にその文章上の苦悶がその頂上に達してゐた。心から、スタイルから、文章から、すべて新しくならうとかれは苦心した。

かれはかれが多年一緒に歩いて來た紅葉、水蔭、漣、柳浪、思案、さういふ人達に多くの不満を抱き、何うかしてその舊い駄洒落、場當り、結構、通俗から脱しようとした傾向は、當然の結果として、かれを硯友社同人の勢力から遠ざけて行くやうな形になつて行つた。硯友社同人の中では、柳浪も繼子であつたが、眉山君もまた後には繼子扱ひをされるやうになつた。

しかし、眉山君は其時既に大家としての名聲を世に打立てゝゐた。下つて新進の人達に伍するわけには行かなかつた。さうかと言つて、新進の上に立つてそれを指導するといふ位置にも達してゐなかつた。かれは舊文藝と新文藝との中途に彷徨した。

かれはつねに新しいスタイルを出さうと苦心した。三浦半島の旅から歸つて、牛込築土附近の下宿屋に、それから南山伏町の寓に移つたが、しかし何うしても思つたやうな作が出来ないので、煩悶に煩悶した。その時分、かれの書いたものに未完のもの多かつたのは、一面その消息を語つてゐる。それに、生活の方にも不如意のことが多かつた。紅葉の家へもう滅多には行かなかつた。

私は其時分、二年ほどかなり深くかれと交際した。勿論、その時分は、眉山君は私達に取つては先輩で、大家で、その名聲も隆々として世に鳴つてゐたのであつた。私はその頃、牛込の喜久井町の林を裏にした小さな家に住んでゐた。私の妻もまだ來てゐなかつた。その頃、家事の都合で、少し身を躲して置かなければならないからと言つて、一週間ほど、私の家に來て居たことがあつた。私は其時分讀んでゐた本の話などをよくした。レルモントフの『現代の英雄』をレクナムか何かで私が讀んでゐて、主人公のベチヨリンがベルシヤに行くところの一條を話したりした。眉山君は姿も形も貴公子然としてゐて、言ふことにも何となく柔かな氣高い品の好い處があつた。あのやさしい姿の中に人知れずかくれたあの激しい心！

『は、さうかね。』

かう言つてかれはいつも話の調子を取つた。今でも、私の妻などは、それを言ひ出しては、故人を偲ぶの材料とした。

妻は常に言つた。『何うして、あんなやさしい人がそんなことをなすつたんでせうね。』

眉山君は南山伏町から北山伏町へと移つた。『獨掌不浪鳴』といふ半切の幅物がいつでも床にかけてあつて、訪問すると、眼を眞赤にしてそして出て來た。

『昨夜、たうとう眠れなかつたもんだから……。』

始終夜更しをするといふ割合に、かれは作品を世に公にしなかつた。『眉山君、何うしてゐるだらうな。』かう人々の評判してゐる蔭には、あんなに何も書かずはどうして生活してゐるだらうといふ意味がふくまれてゐた。

それこれしてゐる中に、紅葉山人が死んだ。文壇は次第に新しい機運が動いて來た。沈滞々々の聲の盛んな中に、又は外國の翻案ものなどの多く出る中に、下萌の草のやうに、新しい運動は次第に首を擡げて來た。小栗風葉君なども、この新機運に對してはかなり煩悶したらしいが、それ以上に眉山君は煩悶を重ねたらしかつた。何うかして一新境を開きたいと思つて、かれはいろいろな試みをやつた。後には、風葉君なども往來した。

かれは茶の湯とか、盆栽とか言ふものに趣味を持つてゐた。茶の湯の方はかなり深いらしかつた。

『僕も一人持ちますよ。いつまでかうして獨身でゐても仕方がない。』

私が妻を持つてから、三四年して眉山君はかう言つて笑つた。しかし、矢張容易に細君を持たれな

つた。それに、男女のことに關しては、會て深い創痕を女から受けた經驗を持つてゐる人のやうなところがあつた。

その中、今の未亡人が迎へられた。その時分、私も私の妻もよくその南山伏町の家に行つた。未亡人は美しい色の白い氣のおけない人で、妻などは殊にその暖い家庭に傾倒した。

後には、龍土會にも、眉山君はよく出かけて來た。大家らしい氣分はすつかり捨て、我々後進と一緒に新運動の中に入らうと心がけられた。しかし、矢張捨て、も捨てられないのは昔の位置であつた。又昔のスタイルであつた。

私が代々木に引越して來てからは、次第に交通が疎遠になり、今まで月に二三度必ず逢つたが、後には二月も三月も逢はないやうになつた。

かれは淋しかつたに相違なかつた。『春星社』といふかれの門下の集合はあつても、そこにはかれの力になり又話相手になるやうなものは一人もなかつた。やがて『破戒』が公にされ、『獨歩集』が評判になり、白鳥、青果なども出て來た。

私はかれの自殺した天神町の寓には、一度しか行つたことはない。それは、『二十八人集』の原稿のことで、國木田君の爲めに、一篇舊作をわけて貰ひたいことを話すと、かれは快く承諾して呉れた。それは丁度、門下の『春星社』の人達の集つてゐるところで、私も一緒に雜つて寫眞などを撮つた。

それから間もなくである。かれの死んだのは――。

私は明かにその曉の心理をつかむことが出来るやうに思つた。かれは遂に遂にこの世の中に生きて行くことが面倒になつたのである。不斷持つてゐる追跡狂、何事も内につゝんで表へあらはすことの出来ないやさしい柔い性質、位置と名聲とに重きを置いた心持、さういふものが、遂にかれをしてその傷ましい最後を遂けしめる原因となつたのである。

六月十五日、それは私の勤めてゐた社の記念日であつた。社に出ると、石橋思案君が、眉山がやつてね、剃刀で……。

『え？』

私は吃驚した。

『今、行つて見て來たがね、見事にやつてゐるんだよ、此處のところを……。』首のところを示して、『今朝早く暗い中に起きたから、何をしてゐるのかと思つたんだとさ。すると唸聲がしたので、細君が行つて見ると、剃刀で、もう立派にやつてゐるといふ始末さ。それから電話で知らせて來たからね。』

私は何とも言はれない驚愕とショックとを覺えた。私は藝術家のさびしさをつくづく思つた。藝術家は往々にしてかうした悲劇を味ふべく運命づけられてゐるのではないか。眞面目なれば、眞面目なほど……。それにしても何故私は度々かれを訪問しなかつたらう。そしてそのさびしい心を醫す伴侶となつて

やらなかつたらう。かう思ふと、私は記念日の宴席などに落附いて列つてゐられないやうな氣がした。會がすむと、すぐ其處を出て、新片町に島崎君を訪ねて、その話をした。

『え、本當ですか。』

島崎君の聲も驚愕に震へた。

我々藝術に従事してゐるものは、時に際しては、かうした悲劇に面しなければならぬ素質と運命とを持つてゐるのである。戀と死、藝術には、それがいつもつき纏つてゐるのである。戀と死とに由つて、我等は普通平凡な人間生活から深い深い神祕の境に闖入して行くのではないのか。

『人ごととは言はれないね。』

『本當だね。』

私達はかう言つて黯然とした。

通夜の時には、高瀬文淵君が酔つてやつて来て、硯友社の同人が賑かに話してゐるのを餘所にして、棺に向つて、『だから、僕があればと言つたぢやないか。妻や子を持つのは、藝術家として考へ物だつて……。君は好きさ、死ぬ君は好きさ。残つたものを何うするんだ！』かう生きてゐるものにも言ふやうに涙を流して言つたが、その態度とその聲とは、今だに私の眼と耳に残つてゐる。

『生』を書いた時分

『生』の筆を私は明治四十一年の三月一日から執つた。

その四五日前から、島崎君の『春』が朝日に連載されたので、従つて、一層奮闘しなければならぬやうな氣がした。

私は自分の文學的位置が非常に危険な位置にあることを自覺した。又一面非常に大切な位置に置かれてある事を思つた。『蒲團』で多少のセンセーションを文壇に捲き起した私は、その年の正月に、『一兵卒』と『土手の家』を書いた。これが又二つとも評判が好かつた。今にして、全力を擧げなければ、何時再びかうした機會が来るだらう。かういふ風に私は思つた。

私は大抵社から歸つて来て、夜、机に向つた。書齋の灯が明るくあたりを照してゐるのも氣持が好かつた。

私は一回、一回と筆を進めた。

『生』の題材は、私が數年前から心がけて持つてゐたものである。自分の周圍の人達のことであるだけに、想像は用ゐなくても好かつたけれど、それだけ書きにくいところがある。ことに母親のことに關しては、情に於て恐びないやうなところがある。しかし、これを突破しないで、何うしよう。かう思つ

て私は何も彼もかくすところなく書かうと決心した。

最初に閉口したのは、挿畫であつた。畫家は毎日私の文を読んで呉れる筈であるけれども、その畫家に頭がなかつたのかそれとも一回つつよんでは、人物が旨く頭に入らないのか、毎日出て来る人物が皆な違つてゐる。母親などは、難かしい嫁いぢめの婆さんとしか思はれないやうに書いてある。兄もさうである。嫂もさうである。銑之助もさうである。

私は私の文の意がその挿畫によつて、完全に讀者の頭に入つて行かないことを非常に恐れた。

私は毎朝新聞を手にすることが苦痛であつた。挿畫を見るのが苦痛、文をよみ返して見るのが苦痛、それから社に出かける途中新聞を手にしてゐるものを見るのが苦痛、社に行つてから編輯の人達、殊に前田君の顔を見るのが苦痛であつた。前田君が何か言はうとすると、『まア、放つて置いて呉れ給へ。』と言つて手で止めた。

それに、私達の向う側に立つた人達、G君やI君やH君やさういふ人達の敢てした反抗的防碍、それが随分私の若い心を痛めた。その癖、一方では評判が好く、今まで此方から頼んでも振向いても見ず、又はるても居留守を使つたやうな出版書肆までが、競争的に私の宅に押かけて来て、見えすいたやうなお世辭を使つた。

私は作をするそれ以上に、社會と言ふものに對してしつかり立つて見せなければならぬことを感じた。社會などと言ふものは、一種の流行見たいなもので人の價值を輕々につけて了ふのである。かうも考へれば、又社會が一面個人を奮勵努力させるものであるといふことをも考へた。

それに、その時丁度運わるく、S書店からの『蒲團』に對する版權告訴事件が起つた。これは何でもG君などが、『田山は生意氣だ。ひとついぢめてやれ。』といふ態度から出たものださうだが、私に取つては、『生』で心身を勞してゐる最中、尠なからざる大痛棒であつた。私は度々検事局に呼ばれて、小原檢事などの取調を受けた。

しかし、そんなことに負けたり、崩折れたりしてはゐられない私の位置であつた。私は頭に絡みついて来る苦痛を振拂ひ振拂つて、母親や兄や嫂の家庭の紛糾を書いた。母の死の苦痛は私の熱した頭に絡みつくやうに感じられた。

一方、私は島崎君の『春』に注意した。毎朝必ずそれを讀んだ。それは通俗的には受けないといふ評判であつたが、しかしその印象的の筆致は、夷の思ふ所にあらずといふ風にすぐれてゐた。島崎君は何うしても私よりは役者が上だ。かう思つて私は進まぬ筆を呵した。

國木田君は茅ヶ崎の病床で、『どつちもまづいな。まア、しかし拙い旨いは言はないとしてもあんなにだらしたものを新聞小説にかくものがあるもんか。』かう言つたさうだ。國木田君も、その前年の夏から秋にかけて、長編に筆を染めて『暴風』を書き始めたが、途中で止した。無論國木田君は長編に抱負を

持つてゐたからそれでさういふことを言つたのであらうと思ふ。しかし、國木田君にしても、島崎君にしても、私にしても、新聞に載せる『長編』の試みは、その時が皆最初であつたのである。それに、新聞小説の型を破るといふ意氣も非常に強かつた。新聞の要求の爲めに、自己の藝術を支配されることを私達は峻拒した。従つてあゝいふ作が出来たのである。

『生』の題材に對する苦痛もかなり大きかつた。兄も嫂もまだ生きてゐたので、それに對する解剖にも氣がひけた。さういふ風に思つてゐたかと思はれるのも耻しかつた。多い親類の手前などもあつた。殊に死んだ母親に對する忌憚なき解剖が中でも一番私を苦しめた。母親に無限の同情を持ち、又無限の涙をそゝいだ私だけに、一層辛かつた。モウバッサンの所謂『皮剥の苦痛』——さういふものを細かに私は味はせられた。

この途中で、國木田君が死んで、そのため三日ほど休んだばかりで、兎に角『生』は、最初の私の長編は、何うやら彼うやら終りを告げた。最後の一章を書いた時は、丁度夜であつたが、その時は重い重いをり／＼は押潰されさうに思はれた重荷を卸し得たことを喜んだ。

『生』はしかし反響はかなりにあつた。無論褒貶區々であつたけれども、『まア、兎に角、あれだけのものならば——』といふ風に文壇から認められた。夏目漱石氏は、『裏店長屋の汚ない繪のやうだ、』と言つた。

それを書き終ると共に、私は九州に旅行した。

私と旅

私の旅行癖は随分昔からである。私は十八の時に、母や伯父伯母から貰つた小遣を貯めて置いて、二圓五十錢ばかりの金で、故郷の姉の家から日光に遊んだ。それが一番最初の旅行であつた。

日光には舊藩主の寺坊S院がある。そこに行けば一夜二夜は泊めて呉れる。かう兄が言つて紹介して置いて呉れた。田舎の姉はその泊めて貰ふお禮にしろと言つて、自分の家で製織してゐた結城木綿を一反私に呉れた。

私は故郷まで行くにも、中仙道を歩いて行つたが、故郷から日光に行くにも、汽車には乗らずにテクテク歩いた。佐野から栃木、それから鹿沼に行つて泊つた。そして翌日は例の例幣使街道のさびしい杉並木を歩いて日光に行つた。

そこに一日二日ゐた。私と日光との縁はその時最初に結ばれたのである。そしてその時は豪雨の中に中禪寺から合瀉峠を越して、足尾の赤倉に下りて、そこでも紹介狀を貰つた寺に泊つて、それから渡良瀬川の岸を桐生へと出た。

私には孤獨を好む性が昔からあつた。いろいろな懊惱、いろ／＼な煩悶、さういふものに苦しめられる

と、私はいつもそれを振切つて旅へ出た。それにしても旅は何んなに私に生々としたもの、新しいもの、自由なもの、まことなものを與へたであらうか。旅に出さへすると、私はいつも本當の私となつた。

百姓、土方、樵夫、老婆、少女、さういふものはすべて私の師となり友となつた。私は美しい世間を見た。又つらい世の中を見た。人間と人間との交際をも早く知ることが出来た。

静かな温泉場、長い並木松、一人勞れて寝る床にかをる野菊の花、夕日にてらされたさびしい古驛、朝の美しく晴れた海、さうした盡きない追懐の多い中に、中でも忘れられないのは、水戸から濱街道を浪江まで行き、そこから山の中を横断して、福島に出て、仙臺から盛岡、それから仙岩峠をこえて秋田へと出て行つた旅であつた。旅の知識に乏しい私には、眼に見えるものがすべて新しくめづらしく不思議に思へた。私は小さな手帳と鉛筆を懐にして、をりをりにそれに歌と小説の題材とを書いた。

その手帳は今でも残つてゐるが、その歌と感想とスケッチとの間に、その日につかつた金の高が記されてあつた。十七錢泊賃、二錢草鞋、五錢午飯、二錢菓子、かういふ風に書いてある。そして一日三十錢を越えると、もう少し儉約しなければならぬと思つたのである。私は十二三圓の金で、東北一ヶ月の旅行を終へた。

概して磐城海岸は宿賃が安かつたが、盛岡から秋田に入ると、急に二十二錢、二十五錢となつた。その時分は無論茶代などは置かなかつた。

仙岩峠をこえた處にある生保内村のさびしい旅館、角館附近の美しい紅葉、峠の手前では、村中さがしても、午飯を食はせるところがないので、泣くやうにして頼んで、漸く粟飯を分けて貰つたが、その禮に五錢の白銅を一つ出すと、上さん何うしてもそれを受取らないで困つた。盛岡附近では林檎、秋田ではまるめろをかじりかじり歩いた。

『あし曳の山ふところにねたれども猶風寒し落葉みだれて』いかにもさびしい生保内の一夜であつた。それは丁度日清戦争時代で、國旗が山際の村の藁屋にかけてあつたりした。

歸途は山形に出て、母の故郷を訪ひ、月山の姿にあくがれ、山寺の勝を見て、山形市では祖先の墓を十日町の梵行寺に展した。それから上の山へ出て、金山峠を越え、山中七宿を経、渡瀬の材木岩を見て、翌日は福島へと出た。

房總の旅は〇君と一緒にした。木更津、鹿野山、館山、洲の崎、白濱から引返して海を渡り、浦賀から横須賀、それから伊豆に行つて、箱根を雪に越した。

私が紀行文家として認められたのは、太陽に『日光山の奥』といふ一文を寄せてからであつた。それからつゞいて、『不遇山水』といふ多摩川溯源の記を書いた。

『田山は不遇々々つて言つてゐるが、まだ不遇なんて言ふのは早い。一體、不遇なんて言ふほどのものをいつ書いたんだ。』かう紅葉山人や乙羽君から言はれた。私は生意氣であつたに相違なかつた。

日光には度々行つた。が、中で面白かつたのは、栗山の奥を訪ねた時と、裏山の探検をH君などと一緒にした時と、それから母に侍して紅葉を見に行つた時と、この三つであつた。栗山に行つた時は、奥の奥までを窮めて、日光澤、鬼怒沼まで入つて行つた。

兎に角、旅行は私に種々な知識と感興とを與へた。それに、その時分は、汽車がまだ今日のやうに開通してゐないので、大抵は草鞋穿きで、一日十里、十二里の路をてくてく歩いた。明治三十年には、夏の九月の初めに、三河の渥美半島を訪ひ、福江に杜國の墓の草に埋れたのを弔ひ、伊良湖岬の一村落到十日ほど滞在した。丁度其時、柳田君がそこに行つてゐて、瀟洒な貴族風な大學生ぶりをそこらに振廻してゐて、一緒に船で神島へと渡つた。神島は今一度是非行つて見たいと今でも思つてゐるほどそれほど好風景であつた。尠くとも鳥羽水道の怒濤は、海山の勝として、日本屈指のものであることを私は疑はない。

で、十日ほどゐて、福江から汽船で知多半島の龜崎に渡り、それから汽車で、O君を伊勢の一身田に訪ねた。丁度十五夜で、柳田君とO君と三人で町のある旅館に飲んだが、柳田君が靴の紐を結ぶことも出来ないほどに酔つて、頻りにハイネの詩を朗吟したことを覚えてゐる。其處から柳田君は奈良に向ひ、私はO君にわかれて、東海道のかへりの汽車賃だけで、名古屋から木曾へと木賃旅行をした。

木曾の福島に、島崎君を訪ねた時のさまは今でも話の種である。

妻を持ち、子を持つてからは、旅行にも澤山出られなかつた。それに毎日出勤の身は、日曜しか明けることが出来ないもので、心は街頭の大きな白いカーテンのかゝつた窓から、碧いひろい空に向つてあこがれた。さながら籠の鳥が青空を望むもののやうに。

しかし五六年経つた後には、『大日本地誌』の編纂に従事したので、再び旅に出られる身となつた。そして、其の旅行の方法は、書生時代とは全く變つて、汽車は二等、洋服に大きな鞆、女中に祝儀、處々ではその土地の藝妓などを聘んで見るといふやうになつた。山水とか、勝地とか言ふよりも、その土地の特色、空氣、人情などに興味を有つやうになつたのである。『名張少女』などといふ小説はその時分に出来た。つまり、書生時分に見たりきいたりして羨しく思つたことを段々自分でも實行するといふ形を取つて来たのであつた。従つて、昔やつた探検、探勝などといふことが幼稚臭くつて馬鹿々々しいやうな氣がして来た。それでも、昔の徒歩癖はをりをり出た。五里、十里を歩くことはさう大して苦痛でなかつた。九州に初めて行つた時には、京都までは女を伴れて行き、神戸でわかれて、それから日向、大隅の山の中まで入つた。霧島山に登つた時には、大きな鞆を人足に負はせて、三日も四日もそこらをほうつき歩いた。

三十年の間に、東京が全く一變して了ふほど變つたのにくらべては、田舎はさう大して變らないけれど、それでも交通の便の開けたために、衰へてゐた町が俄かに活氣づいたり、昔賑かであつた處が俄か

にさびれたりした。汽車、電車、軌道の出来て行くにつれて、その土地々々の氣分の變つて行くさまは面白かつた。交通のために、到る處の知識程度が平均され、新しい氣分は輸入せられ、なつかしい昔の町の空氣は次第に消滅しつゝあつた。今では、私は古い靜かな町をさがすやうにして旅行した。

地理の編纂

『大日本地誌』の編輯の手傳ひを私は明治三十六年から始めた。山崎直方君佐藤傳藏君が主任で、私と他に若い文學士一名、理學士一名が手傳つた。私は山崎君、佐藤君から地理に對する科學的研究の方法を教へられたことを感謝せずには居られない。

最初はその編輯室をO家の邸宅の一室に置いた。光線の暗い陰氣な寒い一間で、いつもほつねんとして私が其處に一人ゐた。退屈すると、草履をつゝかけて、その邸の靜かな庭などを歩いた。

梅が寒空に星のやうに咲いてゐたり、蘇鐵の大きいのが藁にすつかりつゝまれてあつたりした。何うかすると、邸の主人が私一人ゐる處にやつて來た。『小説家なんて駄目だよ、君。紅葉の遺族なんか見たまへ。慘めなもんぢやないか。それよりも、博士方の地理の講義でもきいて、眞面目に勉強する方が好いよ。』主人はこんなことを言つた。それほど博士、學士が尊敬されて、そして我々文學書生は卑められてゐたのであつた。『え、さうですな。』使はれてゐる身の悲しさに、又はそれほどすぐれた作品を公

にしてゐない身の情けなさに、私はかう言つて主人の言葉に調子を合せた。しかし、腹の中では、文學の爲めに、『今に見ろ』と絶叫せずには居られなかつた。

その靜かな一室は、しかし私に取つて非常に好い“Studio”であつた。私は地理の方の用をサツサと片附けて、そして持つて來た外國の新しい小説を繙いた。ダマンチオやイブセンやビョルンソンやハウプトマンの作を流れてゐる新しい思想は、いつもその靜かな一室の空氣に漲り渡つた。

そして夜になると、その空氣は破れて、今度は、やれコントロールが何うの、花崗岩が何うの、あの湖水の成因はマアルか何うかの、標式的二重式火山は何うのといふ話がその明るい電氣の下に繰返されるのであつた。山崎君は外國から歸つて來てまだ程の立たないハイカラなので、室に入る前に、いつもきまつて、コッコツと二つほど扉を外から叩いてそして入つて來た。

山崎君は霸氣に富んだ、聰明な、何處か皮肉のこもつた調子で、若々しく話した。いかにもハイカラの學者といふ風があつた。それに引かへて、佐藤君は、肥つて、脂ぎつて、常に勞爾してゐた。晩酌を一杯やつて來ると見えて、顔はいつも赤いのが常であつた。

學者としては、佐藤君の方が學者らしいけれど、才氣の横溢した山崎君の知識は、私を感服させずには置かなかつた。山崎君は地理——殊に、人文地理にかけては、何でも知つてゐた。いろいろなことを私は教へられ、且つ暗示させられた。

山崎君は文學の方にも満更素人でもなかつた。私がパウエル・ブルジエの本などを持つてゐると、『何です、これは？』は、ア、心理小説ですね。』などと言つた。

それから雑誌経営や、文壇の話などもめづらしがつて聞いた。ドイツにゐる時分、アルプの山中に、詩人ガンクホウヘルを訪問した時の話などは、私を喜ばせた。それから若い白耳義詩人の群の故郷とも言つて好いブルウジの故市の話などもしてきかせて呉れた。文學士齋藤隆三君の歴史の話なども私には非常に有益であつた。

その靜かな、Studioには、獨歩が二三度やつて來た。

『やア好い處だな、これは……。』

かう言つて、

『いつも一人きりかえ？』

『夜になると、地理の先生が來るんだよ。』

『でも、晝の中は一人だらう。のんきで好いな。それぢや、こゝで自分の仕事位出來るア。』

『まさか、書くわけには行かんがね。』

『構はんさ、書いたつて……。』

こんなことを言つて、元氣に庭などに出かけて行つた。

『贅澤な暮しをしてゐるもんだな。』

『でも、存外靜かだよ、君。主人公は朝早く行つて了ふと、あとは、奥に家族がゐるばかりで、客なんか減多にないよ、一日、しんとしてゐるよ。』

『勢力圏の人物ぢやないからな、まだ……。ちと贅澤すぎるんだ。』

室の彼方此方に散ばつてゐる地圖地理書を繕いて見て、『旅行に詳しくなるわけだな。かういふものを始終見てゐるんだからな。おい、今度一夜泊りか何かで、何處かへ行かうぢやないか。』

やがて日露戦争が始まつて、私は一年ほどこの編輯事業に遠ざかつたが、歸つて來ると、又それに従事した。

O家の圖書館は、すぐその傍にあつた。そこには地理や歴史の本は澤山はなかつたけれども、それでもよく私は其處に行つて、いろいろなものを探して讀んだ。やがて新しい潮流は世間を風靡した。『大日本地誌』の第四卷の出る頃には、私の『生』がもうY新聞に載せられてあつた。

私のアンナ・マアルが私をその靜かな、Studioに訪問して來たりなどした。

しかしその編輯室は、やがて小石川の工場の方へと移されて行つた。

工場の空氣は、O家の邸宅の空氣とは丸で違つてゐた。そこには午飯に食ふ旨い西洋料理もなければ、鰻井もなかつた。菓子などもなかつた。茶はひどい番茶で、卓の上はいつも塵埃と煤烟とで眞黒になつ

てゐた。

『左遷だね、これは。』

こんなことを言つて、山崎君は笑つた。しかし、住宅に近くなつたので、別に不平も出なかつた。

『大日本地誌』は餘り賣れ行が好くなかつたので、段々書肆から繼子扱ひにされて行つた。従つて私達もいくらか張合抜けがして、餘り多く力を費さうとする氣がなくなつた。それに、三十九年には『文章世界』が生れて、私も忙しくなつた。

會合の日が段々少くなつた。一週三回になり、二回が一回になつた。その一回にも、後には私はよく休んだ。

一週一回の木曜日がすぐやつて來た。『又、今日は小石川だ。』かう言つて私は社から廻つて行つた。工場のけたゝましい汽笛、職工達の荒つぱい氣分、煤烟、ぞんざいな普請から來るわるい感じ、さういふ中で、私達は時には眠い半日を過し、時には寒い一夜をすごした。退屈な寫眞の選擇に二週も三週もかゝつたりした。

『木曜日はやり切れないな。』

かうした不平は、いつも私の口から出た。

それも無理はなかつた。私の郊外の家は遠かつた。電車から電車へ乗り移つて、Yの停車場から下りると、あたりはもうすつかり寢靜まつて、灯影も稀に、軒燈が唯さびしくあたりに輝いてゐるばかりであつた。家に歸ると、妻はいつもいぎたなく幼い兒に添乳をして寢て了つてゐた。『げんげ』といふ短篇はその時分に出來た。

机

書齋の机に坐つて見る。

筆を執つて、原稿紙を並べて、さていよく書き出さうとする。一字二字書き出して見る。何うも氣に入らない。題材も面白くなければ、氣乗りもしてゐない。とても會心の作が出來さうに思はれない。もう日限は迫つて來てゐるのだが、『構ふことはない、もう一日考へてやれ。』と思つて、折角書く支度をした机の傍を離れて、茶の間の方へと立つて來た。

『また、駄目ですか。』

かう妻が言ふ。

『駄目、駄目。』

『困りますね。』

『今夜、やる。今夜こそやる。……』

かう言つて、日當りのいゝ縁側を歩いたり、庭の木立の中を歩いたりする。懐手をして絶えず興の湧くのを待ちながら……。

T雑誌の編輯者の來るのが、さうなると恐ろしい。屹度やつて來る。そして何うしても原稿を手にしない中は承知しないといふ氣勢を示す……『貴方はお早いんだから……』かういふ言葉の中にも、複雑したいろいろな氣分が雜る。書く、つまりぬものを書く。それが世の中に出る。批評される……かう思ふと、體も心も隅の隅に押しつめられるやうな氣分になる。

と、今度は、もう何うしても書けないやうな氣がする。焦々して來る。今まで出來たのは不思議なやうな氣がする。材料も何も滅茶々々になつて了ふ。曾て面白いと思つたことも、つまらないつまらないものになつて了ふ。何うしてあんな種を書く氣になつたらうと思ふ……。

『駄目、駄目。』

『何うしても、出來ませんか。』

妻も心配らしい顔をしていふ。

『かうして歩き廻つてゐるところを見ると、何うしても動物園の虎だね。』

『本當ですよ。』

妻も辛いらしい。本當にその辛いのを見てゐられないらしい。それに、さういふ時に限つて、私は機嫌が

わるくなる。いろいろなことに當り散らす。妻を罵る。子を罵る。

『あゝ、いやだ、いやだ。小説なんか書くのはいやだ。』

『出來なければ仕方がないぢやありませんか。』かうは言ふが、妻は決して、『好い加減で好いぢやありませんか。』とは言はない。それが又一層苦痛の種になる。

處へ、T君がやつて來る。

『どうも出來ない。今度は出來さうもないよ。』

『それぢや困りますよ。當てにしてゐるんですから。出來ないと、そこが空いて了ふんだから……』

『だつて、出來ないんだから。』

『ぢや、もう一日待つから。』

かう言つてT君は歸つて行く。

又、机に向つて見る。矢張出來ない。終には、筆と紙とを見るのが苦しくなる。筆と紙と自分の心との中に悪魔が住んでゐるやうに思はれる。

妻は氣にしてソツとのぞきに來る。それも知れると怒られるから、知れないやうに……そして筆を執つて坐つてゐると安心して戻つて行く。

『書けましたか?』

『駄目だ。』

『だつて、さつき書いていらしたぢやありませんか。』

『……………』

ところが、ふと、夜中などに興が湧いて来て、ひとり起きて、そして筆を執る。筆が手と心と共に走る。そのうれしさ！ その力強さ！ 又その楽しさ！ 見る中に、二枚三枚、四五枚は時の間に出来て行く。その時は、さつきの辛い『稼業』などと言つた愚痴は、いつか忘れて了つてゐる。心は昔の書生時代にかへつて行つてゐる。暗いランプの下で、髪の毛を長くして鬪んだ昔の時代に……………。その時には文壇もなければ、T君もなければ、世間も何もない。唯、筆と紙と心とが一緒に動いて行くばかりだ。

プログラム

通に面した入口には、『獨歩追悼演説會』といふ立札が大きく書いて出してあつた。聴衆はもうぞろぞろと入つて行つてゐた。背廣の洋服やら、羽織袴やら、書生風の青年やらが……………。

私は石の階段のある入口の方から入つて行つた。

二階の一室の扉を押すと、T君、N君、Y君、M君などが既に其處に来て集つてゐた。S君も来てゐた。

私は是非何か饒舌らなければならぬことになつてゐた。しかし、私は演説と言ふものをしたことがない。止むを得なければ、朗讀でも好いと云はれて、五六枚書いては来たが、それも出来さうに思はれない。仕方がないので、T君にその譯を話すと、『それは困る。何うしても君はやらなくつちや困る。君かS君かにやつて貰はなくつちや……………。』かうT君は言ひかけて、S君の方を見て、『それとも君がやつて呉れますか。』

『いや、僕は——』

かう言つてS君は斷つた。

何うしても私がやらなければならぬ羽目になつた。聴衆はまあ好い。知らない人だから。それは何と言はうが構はないが、多い友人達にきかれるのが氣がさして仕方がない。その連中には随分わる口屋が澤山にゐるんだから……………。

でも、仕方がないので、やることにして、下に行つて見ると、其處にも友人が大勢来てゐて、頻りに今日のプログラムを折つたり何かしてゐた。

O君、YS君、K君。それに未亡人の妹のI夫人がそこに椅子に凭りかゝつて、矢張頻りにプログラムを折つてゐるのを私は認めた。

I夫人は獨歩の『第三者』に書かれたヒロインである。まだI氏に嫁かない時分、獨歩が原宿に住ん

でゐる時分、丁度十八九で、ちよつと眼につく容色好しで、よくそこで私達は一緒になつた。Y君は『ちよつと綺麗だね。感じが好いね。』などと言つた。

I夫人の方にしても、Y君の瀟洒な貴族的の男振は、目につかないことはなかつたに相違なかつた。私には其時もう妻がゐるが、Y君はまだ獨身であつた。Y君と私とその妹と一緒にゐる時には、妹はきまりがわるさうな顔をして、成るだけ傍に寄らないやうに、又は寄りたいのをわざと寄らないやうにして、いつも姿を躲くすやうにした。『もう、先生、色氣がついて仕方がないんだよ。』などと獨歩は言つた。それがI氏に嫁いで、しかもI氏に惚れられて、名高いK子夫人だといふ評判であつた。『第三者』はその夫婦喧嘩ののろけを書いたやうなものだつた。

葬式の時にも、通夜の時にも逢つたが、別に話もしなかつたので、私はついその傍に行つた。

『御苦勞さまですね。』

『Iさん、あなたのことを聞きましたよ。』

『單刀直入といふ風である。』

『何を……。』

『何をつて……隠したつて駄目ですよ。』

『何の事だかわからない……。』

大勢其處に人がゐるので、流石にその内容まではすつば抜かなかつたけれど、私は受太刀で、頗る閉口してゐると、其處に運好くY君が入つて來た。

『此處でも中々忙しいんですね。』

かう愛嬌をふりまいて近づいて來ると、I夫人は急に眞面目になつて、寧ろ明るい光つたもの前に出たもののやうにおとなしくなつて、Y君の端麗な顔を見ぬやうにして竊み見ながら、

『いろいろお世話になりました。』

『いや——』

Y君は取すましてゐる。

私はふと不思議な氣がした。二人の様子を見てやれ！と思つた。小説の One chapter になりやうなやうな氣がして、何處かでくすぐつたいやうな氣もしてゐた。

Y君も久し振でI夫人に逢つたらしかつた。その傍に寄つて來てなつかしさうにして立つた。

『久振でしたね。』

『本當にお久振よ。すつかりお變んなすつて了ひましたね。』

『貴女だつて……。』

Y君は笑つた。I夫人は顔を眞赤にした。

『もう五六年になりますね。』

『さうなりますかしら。』

私に向つて單刀直入に斬り込んで來た調子とは似てもつかないやうなやさしい耻しさうな調子でI夫人は言った。私はいよ／＼くすぐつたいやうな氣がした。面白いシーンだなと思つた。

私は猶ほ立つて見てゐた。

ふと、用事が出來たので、Y S君が立つて行くと、Y君が代つてプログラムと景品の籤（これは書肆から聴衆に贈る筈であつた）と一緒にする仕事を手傳つてやつた。と、I夫人は、今まで景品の籤を出してゐたO氏に、

『代りませう、私が……』

かう言つて代つた。見てゐると、Y君の手とI夫人の手とが、その二枚の紙を合はせる度に面白く雜り合ひ交叉し合ふのを私は見た。I夫人は嬉しさうにこにこしてゐた。Y君も面白さうだつた。一枚一枚と合せたものを二人はその傍に積み重ねた。

『随分大變あるね。こんなに聴衆が來るのかね。』

Y君はこんなことを言つた。スツキリとしたフロクツコオトの立姿は、I夫人の椅子に腰をかけた姿とよくつり合つて見えた。

私は獨歩を思ひ出してゐた。かれにこのシーンを見せたなら、『滑稽だね』と言つて、手を拍つて笑つたであらうなどと思ひながら……。

『田舎教師』

私は戰場から歸つて、間もなくO君を田舎の町の寺に訪ねた。その時、墓場を通りぬけやうとして、ふと見ると、新しい墓標に、『小林秀三之墓』といふ字の書いてあるのが眼に着いた。新佛らしく、花などが一杯にそこに備へてあつた。

寺に行つて、O君に逢つて、種々戰場の話などをしたが、ふと思ひ出して、『小林秀三つていふ墓があつたが、きいたやうな名だが、あれは去年、一昨年あたり君の寺に下宿してゐた青年ぢやないかね。』

『さうだよ。』

『いつ死んだんだえ？』

『つい、此間だ。遼陽の落ちた日の翌日か何かだつたよ。』

『可哀相なことをしたね、何だえ、病氣は？』

『肺病だよ。』

『それは氣の毒なことをしたね。』

私はその前に一二度逢つたことがあるので、微かながらもその姿を思ひ浮べることが出来た。私は一番先に思つた。『遼陽陥落の日に……日本の世界的發展の最も光榮ある日に、萬人の狂喜してゐる日に、さうしてさびしく死んで行く青年もあるのだ。事業もせずに、戰場へ兵士となつてさへ行かれずに。』かう思ふと、その青年、田舎に理れた青年の志と言ふことに就いて、脈々とした哀愁が私の胸を打つた。つづいて、『親々と子供』の中の墓場のシーンが眼に浮んで來た。バザロフとは丸で違つてはゐるけれども……。

私は青年——明治三十四五年から七八年代の日本の青年を調べて書いて見ようと思つた。そして、これを日本の世界發展の光榮ある日に結びつけようと思ひ立つた。ことに、幸ひであつたのは、その小林秀三氏の日記が、中學生時代のものと、小學校教師時代と、死ぬ年一年と、かう纏つてO君の手許にあつたことであつた。私は早速それを借りて來て讀んだ。

この日記がなくとも、『田舎教師』は出來たであらうけれども、兎に角その日記が非常に好い材料になつたことは事實であつた。ことに、死一年前の日記が……。

この日記は、或はこの小林君の一生の事業であつたかも知れなかつた。私はその日記の中に、志を抱いて田舎に埋れて行く多くの青年達と、事業を成し得ずに亡びて行くさびしい多くの心とを發見した。私は『田舎教師』の中心をつかみ得たやうな氣がした。

日記は、その死の前一日までつけてある。勿論、寢ながら、且つ苦みながら書いたらうと覺しく、墨もうすく、字も大きな拙く書いてあるけれど……。私はそれを見て泣きたいやうな氣がした。遼陽の攻略の結果を、死の床に横つて考へてゐる小さなあはれな日本國民の心は、やがてこの世界的光榮を齎し得た日本國民すべての心ではないか。

それに、舞臺が私の故郷に近いので、一層その若い心が私の心に滲み通つて感じられるやうに思はれた。日記を見てから、小林秀三君はもう單なる小林秀三君ではなかつた。私の小林秀三君であつた。何處に行つてもその小林君が生きて私の身邊について廻つて來てゐるのを感じた。

かれの眼に映つたシーン、風景、感じ、すべてそれは私のものであつた。私は其處の垣の畔、寺の庭、霜解の道、乗合馬車の中、到る處に小林君の生きて動いてゐるのを見た。

E町の寺に行くと、いつもきまつて私はその墓の前に立つた。そこには既に友人達の立てた自然石の大きな石碑が立てられてあつた。そこに、戀もあり、涙もあり、未死の魂もあり、日本國民としての可憐の愛國心が生きて蘇つて來てゐるのであつた。私は野に咲いた花を折つて來てそこに手向けた。

私は秋の日など、寺の本堂から、ひろびろとした野を見渡した。黄く色ついた稻、それにさし透つた明るい夕日、何處か遠くを通つて行く車の音、榛の木の疎らな影、それを見ると、其處に小林君がゐる、

そして私と同じやうにして矢張、その野の夕日を眺め、荷車の響をきいてゐるやうに思つた。

『悠々たる人生だ。』

かうした嘆聲がいつとなく私の口に上るのであつた。

戦場での凄しい砲聲、修羅の巷、残忍な死骸、さういふものを見て來た私には、ことにさうした靜かな自然の景色がしみじみと染み通つた。その對照が私に非常に深く人生と自然とを思はせた。

ある日、O君に言つた。

『彌勒に一度伴れて行つて呉れ給へ。』

で、秋のある靜かな日が選ばれた。私達は三里の道、小林君が毎日通つて行つたその同じ道を靜かにたどつた。野には明るい日が照り、秋草が咲き、里川が靜かに流れ、角のうどん屋では、上さんがせつせとうどんを伸してゐた。

私は最初に、かれのつとめてゐた學校をたづねた。かれの宿直をした室、一緒に教鞭を取つた人達、校長、それからオルガンの前にも伴れて行つて貰つた。放課後で、校庭は靜かに、矢張同じやうにして、教師や生徒がボールなどをなけてゐた。

彌勒の村は、今では變つて賑やかになつたけれども、その時分はさびしいさびしい村だつた、その湯屋の煙突からは、靜かに白い煙が立ち、用水縁の小川屋の前の方では、百姓の塵埃を燃してゐる煙が斜

になびいてゐた。

私とO君とは、その小川屋で、さいの煮附で酒を飲んだ。

學校の校長が、私が話を聞きに行つたのを探偵にでも來たのかと思つて、非常に恐れてゐたのも滑稽であつた。

それから私は一度小林君の親達の住んでゐる家を訪ねた。矢張、小林君のことを小説にするとは言へないので、書畫の話を聞くふりして出懸けた。私はやさしい母親とのんきな父親とを見た。その家は實に小林君の死の床の横つたところであつた。

この家を訪問してから、『田舎教師』に於ける私の計畫は、やゝ秩序正しい形を取つて來た。日記に書いてあることがすべてはつきりと私の眼に映つて見えた。で、更に行田から彌勒に行く道、かれの毎日通つた路を歩いて見ることにした。

私はいろいろに考へた。寺に寄宿した時代のかれは、かなり詳しくわかつたが、その交遊の間のこと何うも飲み込めない。中學校時代の日記は、空想澤山で、何れが本當かう、そかわからない。戯談に書いたり、のんきに戯れたりしてゐることばかりである。三十四五年——七八年代の青年を描かうと心がけた私は、かなり種々なことを調べなければならなかつた。その頃の青年でも、もう私の青年時代とは、餘程異つた特色やらタイプやらを持つてゐたから……。『明星』にあくがれた青年、半はロマンチ

ツクで、ファンタスティックで、そしてまだ新しい思潮には到達しない青年の群——その群を描くことに就いては、私に取つて非常な困難があつた。中學時代のかれの初戀、つゞいて起つた戀愛事件、それが飲み込めないもので、長い間筆が執れなかつた。

二年、三年は経過した。

この作は、『蒲團』などよりも以前に構想したものであるが、『生』を書いて了ひ、『妻』を書いて了つてもまだ筆を取る氣になれない。材料が段々古く徴が生えて行くやうな氣がする。それに、新しい思潮が横溢して來た其時では、その作の基調がロマンチックでセンチメンタルに偏りすぎてゐる。『生』『妻』と段々調子が低く甘くなつて行つてゐるのに、又このセンチメンタルな作では、何うも嫌らないといふやうな氣がする。又、それでぐづぐづしてゐる中に一年二年は経つた。

しかし、日記を繕いて見ると、何うしても書かすには居られない。そこには一期前の現代の青年の悲劇がありありと指すごとく見えてゐる。で、そんな世間的のことは考へずに書かう。ロマンチックであらうが、センチメンタルであらうが、新しい思潮に觸れてゐるまいが、そんなことは考へずに書かう。かう決心して、それからK氏——小林君の親友のK氏を大塚に訪問し、手紙を二三通借りて來たりして、やがて行田に行つて、石島君を訪ねた。

石島君は忙しい身であるに拘らず、私にいろいろな事を示して呉れた。士族屋敷にも行けば、かれの

住んでゐた家の址にもつれて行つて呉れた。

で、その足で、熊谷町まで車を飛ばした。例の用水に添つた描寫は、この時に寫生したものである。それから萩原君を、町の通りの郵便局に訪ねた。丁度、執務中なので、君の家の泉州といふ料理屋に行つて待つてゐた。萩原君はその二男か三男で、今はH町の郵便局長をしてゐるが、情深い、義理に固い人であるのは、『日記』の中にも度々書いてあつた。其日はそこで御馳走になつて、種々と小林君の話聞き、又一面萩原君の性情をも觀察した。

女達の方の觀察をもう少ししたいと思つたけれど、何うも其の方は誰も遠慮して話して呉れない。それに、その女達にも逢ふ機會がない。遺憾だとは思つたが、仕方がないので、そのまゝ筆を執ることにした。

六月の二日か三日から稿を起した。梅雨の降頻る窓際では、殊に氣が落附いて、筆が靜かな作の氣分と相一致するのを感じた。その癖、其時分の私の生活は『田舎教師』を書くには相應しくない氣分に満たされてゐた。焦燥と煩悶、それに病氣もしてゐて、幾度か書きかけては、床に就いた。

しかし、八月一杯には、約その三分の二を書き上げることが出來た。で、原稿を關君に渡して、ほつと呼吸をついた。

それから後は、半は校正の筆を動かして、書いた。關君と柴田流星君が毎日のやうに催促に來る。社の

方だつてさう毎日休むわけには行かない。夜は遅くまで灯の影が庭の樹立の間にかゝやいた。

反響はかなりにあつた。新時代の作物としては物足りないといふ評、自分でも豫期してゐた評がかなり多かつた。それに、青年の心理の描寫がビタリと行つてゐない。かうも言はれた。矢張、自分ですつかり飲込んで了はなかつた部分が、何處か影が薄いのであつた。

巻頭に入れた地圖は、足利で生れ、熊谷、行田、彌勒、羽生、この狭い間にしか概してその足跡が到らなかつた青年の一生といふことを思はせたいと思つて挿んだのであつた。

關東平野の人達の中には、この『田舎教師』を手にしてゐるのを其處此處で見かけた。乗合馬車の中で女教員らしい女の讀んでゐるのを見たこともあれば、こんな旅館にと思はれるやうな帳場に放り出されてあるのを見たことがあつた。『中田の遊廓に行つたなんて、うそださうですよ。小説家なんて、ひどいことを書くもんですね。』かういふ言葉も私の耳に入つた。

實際、中田の遊廓の一條は、假構であつた。しかし、青年の一生としては、さうしたシーンが、形は違つても、何處かにあつたに相違ないと私は信じた。一年間、『日記』が途絶えてゐるのなども、私にさういふ假構をさせる餘地を與へた。それに、その一條は、多少、作者と主人公と深く雜り合つてゐるやうな形である。

刀根の下流の描寫は、——大越から中田までの間の描寫は想像でやつたので、後に行つて見て、ひどく

違つてゐるのを發見して、惜しいことをしたと思つた。矢張、寫生でなければ駄目だと思つた。これに引かへて、發戸河岸の松原あたりは、實際行つて見て知つてゐるので、その地方を旅行した人達からよく賞められた。

刀根川の土手の上の草花の名を並べた一章、これを見ると、いかにも作者は植物通らしいが、これは『日記』に書いてあるまゝを引いたのである。

しかし、兎に角、一青年の志を描き出したことは、私に取つて愉快であつた。『生』で描いた母親の肖像よりも、即きすぎてゐない故か、一層愉快であつた。私は人間の魂を取扱つたやうな氣がした。一青年の魂を墓の下から呼起して來たやうな氣がした。

今でも、私はH町の寺に行くと、屹度その自然石の墓の前に行つた。そして花などを供へた。その墓石は私に取つては、決してもう他人の墓石ではなかつた。その友達の植ゑた檜の木ももう蔭を成してゐたが、最近行つた時には、周圍の垣が壊れて、他の墓との境界がなくなつてゐた。

イブセンソサイチイ

何うも龍土會で會食ばかりしてゐるのでは意味がない。何うせ、會をするなら、もう少し意味のある會にしたい。かう言つて、Y君は、一橋の學士會を借りてイブセンソサイチイを開くことにした。

あの時分はまだ若かつた。O君などは紅顔の美少年からまだ一步出たか出ぬ位で、紺の羽織に袴といふ効々しい扮装でやつて来た。H君の肥つた顔、I君の背の高い、アハ、と大きく笑ふ顔、A君の顔、さうしたいろいろな顔が今でもはつきりと眼につくやうだ。

I君とM君は球などを突いた。

『幽霊』と『鴨』と『小アイヨルフ』と、それからまだ二三種やつたやうであつた。Y君の瀟洒な得意らしい顔がすつきりと夕日の微かにさし通る西洋間の中に見える。A君は長い安樂椅子に身を横へて、をり／＼自分の考へたことを話す。『さア、何うしたシンボルかな。あの白馬が不思議だ、』などと、『ロスメルスホルム』の象徴について言つた。

『鴨』の時には、議論がかなり沸騰した。露骨に物を言つて了つて好いか、それとも靜かに落附いてゐる妥協生活の中に石を投げ入れるやうなことをするのが好いかわるいか。何でもさうした議論であるらしかつた。『何うも、此作では、イブセンは何方に荷擔してゐるか、ちつともわからない。イブセンも此處に至つて、別袂の罪惡を認めたらしいやうなところがある。』かうY君は言つた。

新思想の争ひ、さういふことについても大分議論が沸騰した。てんでに勝手なことを言ふのであるが、それでも、そのため、いろいろな雑誌や批評を研究して來るので、時にはめづらしい材料などもかなりに集つた。O君は殊に、演劇に深いので、外國での役者の扮したイブセンの作中の人物の寫眞などをよ

く其處に持つて來た。

で、一二時間ほど饒舌ると、この次は何をやるといふことをきめて、それから奥の日本風の座敷で、牛肉を煮て食つたり、西洋料理を取つて食つたりした。其處では、文壇の話が盛んに出た。

丁度O君の首唱する自由劇場の開演の準備近くであつたので、さういふ話も一座を賑やかにした。それに誰も皆若かつた。話には火花が咲き、それからそれへと話は盡きずに、夜の十時すぎまでも饒舌りつゞけた。

『ちやこの次は來月の最初の木曜日。』

こんなことを言つて、ぞろぞろと其處から出て來た。夜空には、星がキラキラと光つて、私達の前には無限な明るい希望のある世界がひらけてゐるやうな氣がした。『おい、君はすぐ歸るか、なら、一緒にあそこまで行かう。』A君とI君とはかう言つて並んで歩いて行つた。

東京の發展

此頃の東京の發展は目覺しいものであつた。變遷の空氣の中に浸つてゐては、それが目に立つてそれとわからぬけれど、田舎からでも來て、ひよつとその真中に置いて行かれれば、何處が何うかさつぱりわからなくなつたに相違なかつた。市區改正は既に完成され、大通の路はひろく擴げられ、電車は到

るところに、その唸るやうな電線の音を漲らせた。

明治十四年あたりの東京は？ 泥濘の路に圓太郎馬車の駛つた東京は？ 橋の袂に飲食店の多く出てゐた東京は？ 箱馬車の通つた時分の東京は？

電車が出來たために、市の繁華の場所も、次第に變つて行つた。郊外に住む人も、買物をするには、その近所で買はずに、電車で、市街の中心へと出て行つた。従つて三越、白木屋、松屋などといふ呉服店も大きな構へとなつた。

主として、電車の交叉するところ、客の乗降の多いところ、さういふ箇所が今迄の繁華を奪ふやうになつて、市街の状態が一變した。銀座の尾張町の角、神田の須田町、上野の廣小路、それに見附々々の街は昔とは丸で變つて了つた。

交通の便につれて、住民の種類の變つて行くのは、寧ろ本能的、無意識的と言つても好い位で、注意して見てゐると、其處に一番烈しい變遷の渦を卷いてゐるのを見ることが出來た。

大通も殆ど渾て江戸時代の面影を失つて了つた。破壊と建設との縮圖は、一時東京の市街に不思議な、不統一な光景を示したが、今ではそれも一段落ついたやうに、不統一のまゝに落附いて了つた。日比谷公園、凱旋道路、東京驛の大きな停車場、あそこいらあたりも、考へると、全く一變して了つたものだ。日比谷は元は練兵場で、原の真中に大きな銀杏樹があつて、それに秋は夕日がさし、夏は砂塵、冬は

泥濘で、此方から向うに抜けるにすら容易でなかつた。ことに、今の有樂門から櫻田門に通ずる濠に添つた路は、雨が降ると路がわるく、車夫は車の齒の泥濘に埋れるのを滴したところである。そしてそれが少くとも明治二十七年まで、さういふ風であつた。そして日比谷の大神宮に行く途中に、グランド・ホテルといふ今ではあんな小さな小さな外國旅館なんぞ見たくても見られないやうなホテルがあつた。そこを歩いて私は中央新聞社に毎日通勤した。

私が東京に來た頃には、東京府廳は土橋の中にあつた。その時分には、流石に、まだ江戸の昔の空氣が處々に渦を卷いてゐて、高い火見櫓、大きな乳のついた門、なまこじつくいの塀などが並んだ。確か府の中學校もその構内にあつた。私は一年二季に、僅かな父親の恩給の金を其處に受取りに行つた。其頃は役人達は日本風の家屋の一部に卓を並べて、傍に本箱を置いて、小さな硝子張りの口から書類を受渡した。今では、田舎に行つても、もうさうした光景は容易に見られない。

従つて丸の内は、いやに陰氣で、さびしい、荒涼とした、寧ろ衰退した氣分が満ちわたつてゐて、宮城も奥深く雲の中に鎖されてゐるやうに思はれた。何といふ相違であらう。今は濠の四周を輕快な電車が走り、自動車が飛び、をりをりは飛行機までやつて來た。今ではさびしさとか陰氣とかいふ分子は影も形も見せなくなつて了つた。宮城の松、その上に靡く春の雲、遙かにそれと仰がれる振天府、すつかり新しく生々とした色を着けて來た。

外濠の電車の通るあたりも、全く一變した。溜池——その岸には、春はなづ菜、根芹などが萌えて、都人士が摘草によく出かけて來たものだが、それが埋立てられて、今の賑やかな狭斜街になり、青山御所の向うには、大きな東宮御所が建築された。この濠端の花の見事なことは、今は東京名所の一つに數へても好い位だ。辨慶橋の柳の緑、春雨の烟る朝などは、何とも言はれない情趣に富んでゐる。

四谷、神樂坂、本郷、この三つの通りは、城の外廓で賑やかなところであつた。四谷はさう昔と變つてゐない。神樂坂も半分は元のまゝである。この濠端の道、これが随分長い殺風景な路で、春先、風の吹く頃はほこりが立つて、古着屋の店に色の褪せた古い着物などが翻つてゐるものだが、今ではその面影をも見ることが出来ない。本郷の通りは概して幅廣くなつた。あの有名な栗餅の店ももうなくなつた。でも、下町、ことに、日本橋の奥の方に行くと、今でも江戸の町の空氣の残つてゐるところがないでもない。親父橋、思案橋附近、横山町あたり、そこらに行くと、土藏が連つて並んでゐたり、大きな問屋があつたりして、何となく三百年の江戸の繁華の跡を見るやうな氣がする。

それから下谷の竹町、御徒町の裏通りにも、こんなところがあるかと思はれるやうな、一三十年代以上も時勢に後れた街の光景を見ることがある。そこには、江戸時代と言ふよりも、寧ろ明治十五六年代の街の縮圖を私に思はせる。

概して、東京の外廓は、新しく開けたものだ。新開町だ。勤人や學生の住むところだ。そこには昔の古い空氣は残つてゐない。江戸の空氣は、文明に壓されて、市の真中に、寧ろ底の方に、微かに残つてゐるのを見るばかりである。

かうして時は移つて行く。あらゆる人物も、あらゆる事業も、あらゆる悲劇も、すべてその中へと一つ一つ永久に消えて行つて了ふのである。そして新しい時代と新しい人間とが、同じ地上を自分一人の生活のやうな顔をして歩いて行くのである。五十年後は？ 百年後は？

昔の人

『矢張、物を買ふには、老舗に限る』

かう言つて、私の知つてゐる今年六十一二になる爺さんは、いつも日本橋の方の通へと出かけて行つた。

鯉節はにんべん、半べんは半茂、小田屋の漬物、十軒店の稻荷鮓、同じ横町にある湖月、納豆は神田明神の境内の中の三河屋、榮太樓の甘納豆、鮓は日本橋の帆かけ鮓、牛肉は淡路町の中川といふ風に……爺さんに取つては、通は變つても、家は變つても、昔馴染んだ店が今だにその前に動いてゐた。『私なんかよく知つてゐますが、十軒店の稻荷鮓つて、爺さん婆さんがやつてゐたもんですよ。私なんか若い時分には、小さな屋臺見たいな店でしてな。そこに、皆休んで、腰かけて、食つて行つたものですよ。』

非常にはやりましてな。一代で、今の身代にしたんですが……』こんなことを話すかと思ふと、自分が若い頃、お店奉公に行つてゐた唐物店の大きな店が、すっかり微祿して、最近に行つて見たら、賣家札が張つてあつたなどといふ話をした。

『何も彼もまづくなりました。つくだになんか殊にまづくなりました。それに、菓子が変わるようになりましたな。風月なんて言つたつて、昔の味はなくなりました。菓子では矢張、十軒店の田月か、でなければ濱町の湖月ですな。昔の通りなのは……。』

この爺さんは、それにつゞいて、今日まで残つてゐる大通の老肆の話などを詳しくした。やれ、何處の娘は綺麗だつたとか、何處の上さんは別品だつたとか。しかもその娘や上さんは、もう皆な皺くちやな婆さんであるのも可笑しかつた。かれは芝の神明の中の太々餅の話などをした。

『大丸……あそこもなくなりましたな。大したもんでしたがな、元は——あそこの前を通ると、番頭と小僧のかけ聲が遠くからきこえるつていふ風でしたが……。』
いかにも昔が戀しいといふやうな調子で爺さんは話した。

二葉亭の死

『長谷川君が來てゐるがね……。』

かう言つてH君は編輯室の私の傍に來て言つた。長谷川君！ 二葉亭四迷！ 私はいそいそとして應接間に行つて、喜んでH君に紹介して貰つた。

背の高い、容貌魁偉な人を見つた。長い間逢ひたいと思ひ、なつかしいとも思つた人に私は始めて逢ふことが出來た。『浮雲』の作者、『あひびき』の譯者、ロシア文學の最初の鼓吹者、外國の文脈を日本に移植した最初の功勞者、その人が、その大家が、かうした率直な單純な人であらうとは私は思ひがけなかつた。

私は嬉しかつた。

長谷川氏はこれからロシアに行かうとしてゐた。満し難い心、文學に甘んじてゐることの出來ない心、哲學にも深く入ると共に世相にも深く通じた心、さうした心が、故郷に満足されずに、遠くロシアに行かうとしてゐるのであつた。

其時は確かダンチエンコの歡迎會を八百睡あたりで開きたいといふ相談をH君と打合せに來たのであつたが、それから暫くして、私達は氏のために送別會を上野の精養軒に開いた。

文壇に於ける氏の位置は、丁度彗星のやうであつた。立派な才筆を抱いて、當時の作家の群の中に最も高い地歩を占めて居りながら、氏はいつも深く韜晦して、決して文壇の表面にはその形を現はさなかつた。その癖、新しい時代の人達は、皆な間接に氏に感化させられた……。

『二葉亭がもう少し書くと好いんだがな。』かういつも私達は言つた。
ある人は、

『矢張、あゝいふのがロシア文學だよ。見給へ、相棒の嵯峨の屋を……實に、日本ではあゝいふ人間は見られないよ。汚い服を着て平氣である。』

などと言つた。

私は高瀬文淵君を透して、氏の消息をいつも喜んで聞いた。氏はデアキン、ヘツケルの書を最も早く讀んだ一人であつた。科學の概要だけではないと言つて、動物學までも入つて行つたといふことであつた。世間がトルストイ、ツルゲネフに騒いでゐる頃には、氏は既にアルツイバセフ、クウブリン、アンドレーフなどに熟してゐた。氏は尠くとも明治文壇の最も早い先覺者であつた。

しかし彗星のやうな氏は、滅多にその作品を公にしなかつた。『浮雲』以後は、久しく筆を創作に絶つた。そして十年ほどしてから、すぐれたあの『片戀』の翻譯を公にした。それから又五六年は沈黙した。やがてゴルキイの翻譯が出た。そして最近に、『其面影』『平凡』の二作を出した。

かういふ風であるから、氏には敵といふものはなかつた。敵をつくるやうな巴渦やジャアナリズムの中に氏は決して入つて行かなかつた。従つてその送別會が、明治文壇のあらゆる送別會に比して盛んであつた理由もわかる。

その上野の精養軒の送別會には、鷗外氏と露伴氏と漱石氏とを除いた外は、すべてあらゆる派の文士が出席した。新しい人も、古い人も……。

席上で内田魯庵氏が演説した。それに、長谷川氏は立つて謝辭を述べた。魯庵氏の演説も旨かつたし、氏の演説も旨かつた。新舊共に氏に熱い送別の意を表した。

それから、ロシアに行つてから、まだ何事もしない中に、肺を病んで、歸國しようとして、その途中印度洋で、ケビンの中でひとりさびしく氏は逝つたではないか。

ロシアの小説にある作中の主人公、實際氏の一生はルウジンにも似てゐれば、又レルモンツフのペチヨリンの最期にも似てゐるではないか。ルウジンは赤共和黨の亂に戦死した。ペチヨリンは波斯に行つて生死不明になつた。そして氏は満し難い半生の志を抱いて、印度洋の風濤の中に……。

遺骨を新橋停車場に迎へに行つたM君は話した。『何とも言はれない氣がしましたよ。實にロマンチックだ。この新しい思想の漲つてゐる中に、新舊兩派がしのぎを削つて戦つてゐる中に、さうしてさびしく骨になつて歸つて來たかと思ふと、何とも言はれない氣がしましたよ。』

紅葉といひ、獨歩といひ、眉山といひ、氏といひ、すべてかうして、開けないわが明治の文壇の犠牲となつて早世した。そしてこれ等の人々は、皆な今日の日本の文學あらしめるために、墓となつてさびしく地上に横つた。誰かかれ等のことを思はずにゐられるものがあらうか。誰かまた日本の文學のため

にかれ等を思はずにゐられやうか。かれ等の上にもこそ日本の文學の基礎は始めて築き上げられたのではないか。

文學者の交遊

文學者の交遊は、他で思つたほど派手でない。又賑やかではない。それは若い時分には、一日友達の顔を見ずには淋しくつて仕方がなかつたものだが、それが段々往來も稀になつて、二三の親友の他には、餘り交際しないやうなのが多い。

それと言ふのも、文學そのものが、全然根本的、獨立的で、時代に由つて黨同異伐の熾んな時もあるが、いざとなると、何うしても箇人々々の實力を頼りにするより他仕方がないからである。

それに、文學者と言ふものは、一體にデリケートで、小さなことにも怒つたり喜んだりする。つまりぬことを氣にかけることも少くない。従つて、隱忍するとか、二心を抱くとか言ふことは、ちよつと出来ぬ。誠實とか、率直とか言ふことを唯一の資本にしてゐるやうな處があるから、社交的妥協は容易に出来ない。文學者には、社交などは何うでも好いと云ふやうなところがある。

それに加へて、かれ等には、大小淺深はあつても、物に拘泥して且つ拘泥しないといふやうな處がある。貧富とか、功名とか言ふものの上にある基礎を持つてゐる。それに、觀察と言ふものや、解剖とい

ふものが養つた物に動ぜぬ深い理解力を多分に持つてゐる。かれ等にあつては、乞食必ずしも賤しくもない。高官必ずしも貴くはない。つまり價値の標準が非常に世間一般の標準と違つてゐる。

だから、外面では、文學者の交遊は甚ださびしく、疎く見えるけれど、内面の理解は、敵でも味方でも、深いあるものを以て結び附けられてゐるのは、事實である。同じ文壇のために働いてゐる人といふ感じが、同じ學問、同じ職業、同じ仲間のものと言ふ以上に深く染みてゐる。だから、平生は餘りに往來しないでも、心では互に許してゐる。表面の贈答とか、細君同士の交際とか、さういふもので結び附けなければならぬといふやうなものではない。

外國では、文學者の交遊が中々盛んなやうだ。ロシアのエリセフは、曾て日本文壇の交遊のさびしいのを指摘して、それを自分の國の文學者達に比較したが、外國でも賑やかなのは若い時代の人達で、中年以後は、餘りさうした交遊はないやうである。フロオベルの會などでも、決して賑かではない。さびしさうである。

三十年間、私が見て來た日本の文學者の交遊では、紅葉を中心にした硯友社が一番賑かて面白さうであつた。かれ等は一緒に飲み、語り、且つ伴れ立つて旅行した。しかしその交遊なり旅行なりが、興味を中心にしたもので、互に啓發したり互に勵まし合つたりするものでなかつたことは事實である。かれ等の旅行は駄洒落と道樂と興味との旅行であつた。これが即ちその交遊が面白さうに見えたり思はれた

りするところで、單に外面的に過ぎなかつたのである。眉山君などは、後にはその交遊の愚なることを度々私に滴した。

私達の交遊では、龍土會が中心であるが、その他には、交際と言ふ交際もない。勿論二三の親友との絶えざる往來はあるにしても。その癖、一年逢はずにゐても、二年逢はずにゐても、逢へば、『やア、久しぶり振だつたね。』などと言つて握手する。

それに、文學者は、親友は別として、氣や心の合はないものに、無闇に迎合して行く必要がなかつた。且、場合に由つては、自己の本領のために、議論を闘はしたりしなければならぬ場合が多い。お互に自分の自由は完全に保留して置かなければならない。

文壇的ゴシップと言ふことは、昔からあつた。或は今よりも硯友社時代の方が却つて盛んであつたと思はれる理由がある。現に、それを専門にやつてゐる正直太夫のやうな人もあれば、『文學者となる法』を書いた不知庵主人のやうな人もあつた。『めざまし草』の合評などは、とても今日では見たくとも見られない技倆を示したものだ。それに、さうした記事を載せる雑誌も新聞も多かつた。

作者に由つては、却つてこのゴシップの中に身を投じて、それを自己廣告の材料にしたものもないではない。少くともさういふ形を示した作者はかなりある。そして、又このゴシップが存外作者をある程度まで有名にする力を持つてゐる。根本に行けば、何でもないことだけれども……。

しかし、ある作者に取つては、このゴシップは非常に有害で、そして邪魔だ。このために折角持つてゐる貴い氣分を失つた作者などもある。そのために悄氣げて天分を現はさずに終つたやうな作者もある。眉山君の自殺なども多少はそれに影響されてゐる。

『弱くつちや、文壇にはとてもゐられませんね。』

かう言ふことをある作者は言つたが、實際さうである。ゴシップや批評を氣にかけ出したら、それこそ際限はない。硯友社時代には御馳走政策と言つて、批評家に酒を飲ませることが流行つたが、今でも形は變つても、さういふ氣分はまだ残つてゐるやうである。實際、自己を本當に打立てずには、文壇は一寸渡つて行き憎いところである。勿論、普通の世間でもさういふ傾向はあるが、文壇は、正直で、デリケートで、單純であるだけ一層さういふことが眼に立つて見える。

三十年間には、私はいろ／＼な作者の浮沈のさまを見て來た。今日考へて見て、『何うしてあの人が書かなくなつたらう。』と思はれるやうな人がいくらかもある。處女作が非常に立派で、今にどんなにすぐれた作家になるだらうと思はれた人もある。さうかと思ふと、あの男が？と思はれるものが段々立派な作者になつて行つたものもある。若くつて病んで惜しい才を抱いて死んだものもある。非常にその時は意氣込んでゐて、何かの具合で、ふいと他の道に入つて行つたものもある。今だに最初の志を捨てずにその日その日の生活に捉へられて煩悶のしつ／＼けをして來たものもある。いろいろに考へると、私など

も、よくその『Sturm und Drang』の中を通つて来たものだと思ふ。

私は——尠くとも私一箇人に取つては、藝術は、何うしても捨てることの出来ないものであつた。又他に才のない、行く道のない、我儘な私にしては、藝術にすがつて、何うにかして行くより他に仕方がなかつた。それが、その簡単な理由が、その背水の陣を布いた形が、かうして私を長く文壇に残して置いたと思ふと、不思議な氣がしてならない。『いくら出来ない、才のないものでも、勉強すれば、田舎新聞の記者位にはなれる。それだけで結構だ——』そんな風に思つたことも私には一度や二度ではなかつた。

やゝ文壇に出てからは、私は絶えず同じ位の作者を對照にして勉強した。Kはえらい、あの位には是非ならなくつちや。『Fの眞似はとても出来ないが、とてもあの旨い文章は書けないが、もう少し何うかしなければならぬ。』Sの天才は羨しい。あの半分でも出来れば好いが……。『かういふ風にして私はやつて来た。

私は曾て、私の藝術にこびりついた心を、『だから單純だ。樂だ。それから思ふと、獨歩にはもつと複雑なところがある。』と評されたことがあつたが、それは本當であるかも知れない。しかし、他に何うすることも出来ない鈍才であつたといふことが、疑惑を生じさせなかつた素になつたといふことだけは言へると思ふ。

三十年の間の文學者、文學書生、小説家のことを考へると、いろいろ書きたいことが澤山に出て來るが、實際自分ながらかうして今生きてゐるのが不思議な位だ。

龍土會の他に、別に交遊と言ふほどのことはなかつたが、それでも旅には、同人一緒に出かけたことは二三度あつた。

一度は、晩春の候に、龍土會を利根河畔まで持ち出したことなどもあつた。蒲原君、小栗君、中澤君、小杉未醒君などが一緒であつた。確か岩野君も行つたと思ふ。

小栗君が酔つて、喧嘩を吹かけたので、小杉君が怒つて、小栗君の頭をボカンと一つお見舞申した。それでも小栗君は酔つてゐるので、別に怒りもしなかつた。旅館での寝るまでの騒ぎは並大抵ではなかつた。

中澤君と、中央の田村君と、小杉君と三人で、獨歩の借りて住んだ常陸の湊の杉田別荘へ行つた時は、奇談が多かつた。例の紅蓮洞氏も一緒であつた。殆ど酒浸りと言ふやうな旅行であつた。

島崎君とは、信州の志賀村の神津猛君の家を訪ねたことがあつた。それは初冬のもう寒くなる頃で、雪が遠い日本アルプスを白く輝かして見せた。それにも拘らず、庭にはまだ紅葉が残つてゐるといふさまで、靜かな逸興の多い旅だつた。それから、もう一度蒲原君、武林君と島崎君と四人づれて、三四日遊んで來やうと言ふので、三月に伊豆半島に遊んだ。これは藤村集の中の『旅』にすつかり書いてある。

これも面白い興の多い旅であつた。

それから、前田晁君や、窪田君や、蒲原君や、吉江君と一緒に、伊賀から月の瀬に入り、柳生、笠置、それから奈良、宇治、京都と旅行して歩いたことがあつた。この旅では、私が東道の主人で、到る處を成るだけ安い金と短かい時間とで、面白く遊んで來やうと言ふ企てだ。『丸で飛脚のやうだね。』などと蒲原君が言つた。月の瀬から柳生に越える山路では、窪田君や吉江君はかなりへこたれたやうであつた。その他にも、ちよいと旅はしたが今は多く記憶に残つて居ない。

あ る 寫 眞

私の家の寫眞箱の中に、一葉のキャビネ板の寫眞がある。それをある日私は發見して、種々なことを思つた。

それは『文士の目刺し』と言はれた寫眞であつた。裏面には、明治三十六年二月十日自宅撮影と書いてあるが、それは丁度私が牛込の原町に住んでゐた頃で、『重右衛門の最後』などはもうとうに書いてゐた。

蒲原、川上、國木田、小栗、長谷川、それから僕と、かういふ風に並んで、梅の木の下に立つてゐるが、丁度おしめを干したり洗濯物をかけたりする棹が梅の木の枝から枝へとかけわたしてあつたので、

それで貰かれて、目刺し』でも見るやうな形になつた。

『えらい寫眞だ。これは文士の目刺だ。』

かう獨歩は例の奇警な批評をした。

寫眞で見ると、川上君が一番背が高く、獨歩と風葉が一番低い。それを氣にして、獨歩は、『背の低いものは何うしても損だ。どうだ、僕なんか目刺の中から外れさうになつてゐる。』などと言つた。

それは二月の中ほどのまだ寒い頃であつた。その原町の家の上階で机に向つてゐると、欄干の外に梅が白く咲いてゐるのが見えて、それが何とも言はれず友戀ひしさの情に満された。夕暮など殊にさうだ。暮色の中に白く淋しく埋れて行く梅のさびしさが、私の心のさびしさと一緒になるやうな氣がした。

『一つ、會をやるかな。』

かう言つて、端書を彼方此方に出した。觀梅會を開きたいと言つて……。

勿論、その頃は貧しい私だ。御馳走のしようもない。しかし何かめづらしいものはないかなどと思つて、神樂坂までわざわざ出かけて行つて、鴨を一羽買つて來た。

その頃には、お金と言ふ肥つた下女が一人ゐた。『家婢』といふ短篇の中に出て來る女中である。それにKといふ書生、書生と言つても文學志願でも何でも無い、何方かと言へば主人夫婦が押されて了ひさ

うな経験に富んだ書生がゐた。妻はもう二人子持であつた。

『何升あつたら澤山でせう。』

かう書生が訊くので、

『さうさなア、川上君も、小栗君も、國木田も飲むからな。それに、天溪君だつて強い。一人五合は要るな。』

で、それだけの酒は用意した。やがて人々はやつて來た。

『何うも狭いけども、二階の方にしました。こゝなら、梅が見える。その梅の白いのが夕ぐれの色の中に埋れて行くのが、何とも言はず淋しいんですよ。』

『はア、盛りだね。』

などと川上君は言つた。

狭い六疊に膳を並べて、それから半日飲んだ。何を話したか忘れたが、小栗君がお得意の『好いた水仙』を唄つたり、英語まじりの詩を吟じたりしたのを覚えてゐる。獨歩もその頃は元氣だつた。川上君は、『たつて、そんなことを言つたつて——』と言つて、上品な顔を赤くして、金縁眼鏡を光らせた。その『目刺』の寫眞は、もう好い加減に酔つた時分に、バタ／＼と庭に下りて、そしてそこで撮影したのであつた。

蒲原君は、飲むには飲むが、同人中では、何方かと言へば餘り強い方ではなかつた。『獨絃哀歌』を世に公にした時分で、元氣で、大きな聲を立て、笑つた。

會が散じた後、書生は、

『飲みましたぜ！』

と目を丸くしてゐるので、聞くと、五合あて、足らず、更に一升取つて足らず、また更に二升取つたといふことであつた。

『皆な強い。長谷川さんも強いな。』

かう書生は言つた。

もうあれから十四五年、川上君も、國木田君ももうゐない。小栗君にも何年逢はないかわからない。長谷川君には、それでもちよいちよい博文館で逢ふが、昔のやうな興の乗つた話などは滅多にしない。かうして時は過ぎて行くのである。梅ばかりが徒らに白く咲いた。

白鳥氏と秋江氏

正宗君が早稲田で秀才であつたことは、餘程前から私は知つてゐた。

ある日、日館の編輯室で、高山樗牛君が誰かに言つた。『え、正宗つて奴は出来る奴だ。秀才だ。群を

抜いてるますからな。』かう言つたが、その言葉が妙に私にあることを思起させた。それはその前に、高山君が教場でよくその正宗といふ學生に突込まれるといふ話を聞いてゐたからであつた。

『豪いんだな、矢張……』

かう私は繰返した。

處が、私の歌の師匠の許に行くと、その門生名簿の中に、備前の人正宗なにがしといふ名があつた。矢張、その正宗かと思つてゐると、ふとそれはその弟で、兄は早稻田に通つてゐるといふことを聞いた。

正宗君は郷里が近いのと、それに弟の関係もあつて、Y君の處に最初よく出かけて行つたらしかつた。暫くしてから、Y君から又その正宗君のことを聞いた。

正宗君はその頃から外國の新しいものを讀んでゐた。何でも最初に逢つたのは、私がまだ喜久井町にゐる頃で、背の低い、小さな、素氣のない人だつた。妻がよくその真似をした。『正宗——』かう言つて立つてゐる。お時儀もしない。居なければ、すつと黙つて歸る。『變な人ね。』かう妻などは言つてゐた。

正宗君は正宗君で、例の調子で、『何處に行つて見ても、わかい鼻がるるが、碌な鼻はゐないが、それでも、若くほつてりしてゐるのが取得だ。若いから羨しい。』などと言つてゐたといふことだ。

正宗君は、私の書齋から外國の本を持つて行つたには行つたが、君自身もいろいろなものを持つて來

て貸して呉れた。シエンキウツチの『クオ・バヂス』などもその一つである。それから、上野の圖書館に、ツルゲネフの全集が來たことを教へて呉れたり、クラウフォールド女史の『外國文學研究』を貸して呉れたりした。その時分から、正宗君は新しい本を澤山に讀んだらしかつた。

しかし、逢つても、碌々話をしないやうな質で、黙つて聞いてゐて、そしてをり／＼奇警な批評をその中に雜へた。いつも消極的のことばかり言つてゐた。

正宗君が學校を出てから、文壇に打つて出るまでの苦心は、私にも大抵は想像することが出来る。Y新聞記者、劇評家、それから翻譯もかなりやつた。その時分には、『何をやつたつて駄目だ。つまらない。碌なことは出來やしない。文士になつたつて、仕方がない。』かう言つて、じろ／＼と私の顔を見た。

それにしても面白いのは、曾て一度正宗君と私と主觀客觀について大に議論したことがある。正宗君はY新聞の日曜附録で、私はその時分やつてゐた週刊の『太平洋』の紙上で……。

何でも少くとも二三回はつゞけてやつたやうに覺えてゐる。正宗君は其時分、Y新聞の日曜附録をやつてゐて、抱月氏などが頻りにその簡勁な批評をその紙上に公けにしてゐた。

確か『舊友』と言つたと思ふ。その小説が恐らく君の處女作ではなかつたか。私は始めてそこに君の眞の技倆を見たやうな氣がした。

正宗君と前後して、私は徳田秋江君と懇意になつた。正宗君を思ふと、徳田君を思はずに居られない位、私には二人と一緒に思はれた時もあった。徳田君の方が如才がなく、又お世辭もあつたが、何處かべたくしたやうなところがあつた。同級生で、同じ卒業生で、郷里を近くしてゐて、そしてかうして二人文壇に出て行つた形も面白いと私は思つた。

しかし、徳田君は、今でこそ立派な作者であるけれども、正宗君に比しては、文壇に出るについての苦心は、非常に氣の毒に思はれるやうな處があつた。

『何うも旨く書けないで。』かう言つては君は長い髪を蒼白い顔に振りかゝつて來るのを拂つた。

それに、正宗君と違つて、徳田君は、私の兄の隣りに、私の『生』に書いた丘の近くに住んでゐたことがあるので、私や、私の兄や、私の妻なども一層懇意にした。嫂なども大分懇意にしたらしかつた。

ある日、妻が兄の家に行つてゐると、火事があつて、半鐘が鳴つた。と、徳田君ははしごを屋根にかけて、その夫人と一緒に戯れながら、それを見てゐたといふ。それを妻はよく話の種にした。

それは、『疑惑』の中に書いてある家であつた。私は二三度その夫人にも逢つて口を利いたことがあるので、あの小説に描かれた光景は殊にはつきりと私の眼に映つて見えた。私は徳田君と一緒に悶えたり苦んだりするやうな氣がした。

正宗君の隆々とした名聲に比べて、徳田君の小説は長い間世間に認められなかつた。否、寧ろその持つてゐるものがはつきりとその作に現はれてゐなかつた。それが、『別れたる妻に與ふる手紙』に到つて渾然としてあらはれて來た。その才も、その詞藻も、又その情緒も……。

私は尠くともその夫人との君の關係が君を藝術の境に深く伴れて行つたことを思つて、君の煩悶に同情すると共に、又それを祝したいやうな心持がして仕方がなかつた。あれまで思ひ切つて出て行つた君の心の痛さにも十分同感が出来た。

正宗君の生活も、よくは知らないが、さびしさうであつた。『落日』『微光』かうしたすぐれた作がつゝいて出たが、そのいづれにも慘ましい碎かれた作者の魂を私は見た。作者が世間に眼を半ば開き半ば閉ぢて、さびしく空間に面してゐるのを感じた。『毒』にあらはれた戦慄は、小さいけれども、人生の最も奥にある苦しい慘めな悲痛である。そして、君は時々思ひかへしたやうに、『二家族』『初旅』などの方へと引返した。

正宗君と徳田君とが同じクラスメイトで、丸で違つた路を取つて歩いて行つた形なども、私には興味が饒かつた。それは丁度扇の形のやうである。段々遠く離れて行くばかりである。一方は右へ、一方は左へ……。

正宗君はいつまで経つてもさびしい人である。そしてそれをちつと押へて行くことの出来る人である。

『正宗……』と言つて上り口に立つて、ゐなければ何も言はずにさつさと歸つて行くことの出来る人である。徳田君も矢張さびしい人であるけれども、君は正宗君とは違つて、そのさびしさを何うにかしなれば生きてゐられない人である。さびしさを賑かにしなければゐられない人である。この違ひなども作の上によくあらはれて見えてゐた。

本當の意味から言ふと、明治の文學が、あらゆる束縛——文字の遺習、言葉の空虚、形式の繁褥、ロマンチックな根調、さういふものから完全に脱却し得たのは、正宗、徳田この二君の作あたりからである。君達になつて、始めてあらゆる解放を得たのである。紅葉は無論、二葉亭あたりでも、まだ一種の古い型と文字とに捉へられた。獨歩は割合に早くそれを蹴やぶつたけれども、それでもまだ何處かに古い道徳的の臭がある。島崎君や秋聲君や泡鳴君や私でもまだ全然その一時代前の臭ひを脱することが出来ない。言葉の上とか、文字の使ひ具合とかで捉へられたり、考へ方やまとめ方で捉へられたりしてゐる。正宗君や徳田君あたりに到つて、始めてその舊習から擺脫することが出来た。

アスハルトの路

須田町で電車を下りて、それから兩側に長くつゞくアスハルトを敷いた路、そこを私は長い間歩いた。

つまり三十年前に、旭屋やケレー酒を賣る家の大きな外國風の建物がめづらしく街頭に聳えてゐた路である。ガラクタ馬車がラツパを鳴らして泥濘の中を通つて行つた路である。その路は、その土は同じであるけれども、昔のまゝであるけれども、その家並も何も彼も別な街頭と言つてもわからない位に變つて了つた。そこを往來する人々の風俗も著しく別なものになつた。

私は時には、電車に乗りついて、本石町の角まで行くこともあつたが、大抵はそこを歩いて行くことにしてゐた。朝は九時過ぎに、夕は四時過ぎに……。

私はスコッチの冬服を着たり、アルバカの夏服を着たりしててくゞ歩いて行く私の姿を其處に見た。毎日々々同じやうにして繰返してゐる雑誌記者の平凡な仕事に飽々してゐる私を見た。赤い靴をはき、ステッキを持つて、得意然として歩いて行く私を見た。しかし、大抵は暗い心を抱いて私は通つた。私は世間の私に向つて反噬して來るのを感じた。世間といふものの大きな波が、ともすれば、自分の頭上に蔽ひ冠つて來るのを覺えた。舊時代と新時代との間に立つた私は、一方大家連の冷笑を痛く感ずると共に、一方新しい人達から尻をつゝかれるやうな氣がした。それに家庭といふこと、生活といふこと、交遊といふことが、間斷なしに私を悩ました。

アスハルトを敷いた歩道に添つて、銀杏の街樹——街樹と言つても、まだ栽ゑたばかりの、ちよぼちよぼと青い葉のある銀杏樹であるが、それが塵埃にまみれたり煤烟に黒くくろずんで見えてゐたりした。

片側には、海苔問屋、金物屋、小料理屋、小さな呉服屋などが軒を並べた。其處にはいろ／＼な人が住んでゐる。年老いた番頭、禿頭の主人、下町風に綺麗に鬢髻を出した若い上さん、私の幼い頃を見るやうな小僧、さういふ人達が目まぐるしく働いたり動いたりしてゐる。客が出たり入つたりする。せり賣の店があるかと思ふと、專賣の巴風呂を賣つてゐる店がある。四十分で沸く經濟な風呂などといふ廣告が大きく夏の日影に照されてゐる。と、向う側には、『よねまん壽』と大きく書いた饅頭屋がある。大きな老舗の砂糖屋の前には客が一杯入つてゐる。かうした光景の中に、私の退屈や、煩悶や、不安や、戀や、さういふものがゴチャゴチャと雜り合つた。

M屋といふ大きな呉服屋のショウウィンドウは、このアスハルトの長い路の單調を破るものであつた。そこに來ると、誰も彼も立留つた。そしてその美しい帯や蝙蝠傘や晴衣の模様や、その背景を塗つた期節をりをりの繪に眼を鮮やかにするのであつた。私も其處に來ては立留つた。

それから橋を渡る……。電車の通つて行く橋を。それから本石町の角、十軒店の雜店、そこには春は美しい雛が並べられ、五月には、鯉幟や裸の金時の人形が並べられた。

私は其處に來ると、それから一日勤める社の退屈な空氣の身に迫つて來るのを感じた。碧い空を見ては、旅にも自由に出られぬ束縛の身を憐み、降り頻る雨に對しては、歸つて行く傘のないのを心配するやうな身を憐むあはれな空氣を、束縛を、又は煩さい社交を……。

小さな郵便局が角にあつた。それから細い路を左に入る。一町ほど行く。と、其處に社の裏口、裏口と言つても暗い細い窄にでも入つて行くかと思はれるやうな裏口がある。それを抜けて、社の事務を執る室へと入つて行く……。

時には、このアスハルトの路を、一緒に仕事をやつてゐる前田晁君と話しながら歩いて來ることなどもあつた。『貴方がお歩きになるなら、一緒に歩きましょう。』かう言つて前田君は並んで歩いた。

さういふ時には、大抵きまつて文學上の話をしながら歩いた。やれ、誰は何うしたとか、誰の作は拙いとか、誰の議論は徹底してゐないとか、でなければ、雑誌の來月號の計畫の話、でなければ外國の文學の話といふ風に……。

處が、後には河添ひの家で見た美しい妓の話などがそれに雜つた。どうかすると、そのまゝ郊外のさびしい暗い家に歸つて、さびしく寝て了ふのがつまらないので、S附近の小料理店などに上つて、西日のさし込む室で佻しく酒を飲んだりなどした。時には、段々歩きに歩いて、不忍池の畔まで行つて了つたことなどもある。

退屈したそのアスハルトを敷いた路、それも此頃では、もう滅多に歩いたことはない。時々その近所を通ると、銀杏の街樹は既に大きく、春は新緑の色があざやかに女の涼傘に映じて見られた。

明治天皇の崩御

號外賣の聲、それも戦時に於けるやうな賑やかな聲でもなく、さうかと言つて、小さな事件を大きく誇張的に報道する浮はついた聲でもなく、政治の變革を報ずる物めづらしさといふ聲でもなく、何處となく沈み切つた悲痛な號外賣の聲が街路を走つて通つて行つた。

『聖上危篤……』つゞいて、『昨日の御容體』それが四五日つゞくと、二重橋の畔に、聖上の病氣の快癒を祈る國民の群が晝夜群を成すといふことが報ぜられた。

國民は皆な深い憂ひに閉された。誰も彼も憂はしい顔をして靜かに私語いた。一天萬乗の君、宮城の奥深く割られた宮殿の中にも、自然の力は防ぐことが出來ずに犯して入つて行つた。國を盡しての名醫の力でも、こればかりは何うすることも出來なかつた。

明治天皇陛下、"Mutsuhito the Great" 中興の英主、幼くして艱難に生ひ立たれて、種々の難關、危機を通過されて、日本を今日のやうな世界的の立派な文明に導かれた聖上、その聖上の御一生を思ふと、涙の滂沱たるを誰も覺えぬものはなかつた。

一度は陛下にもお別れ申さなければならぬ。かう私ばかりでない、誰も國民は皆思つて來たに相違ない。御即位の大典、遷都の御儀式、さういふものは私は幼くつてまだ拜することが出來なかつたけれど、

陛下の儀仗肅々として街頭を駛る時には、私はいつも略傍の群集の中に雜つて、餘所ながら御威容を拜するのを常としてゐた。つゞいて青山御所より宮城への御移轉、今上陛下の立太子式、つゞいて御成婚の御大典、その時は妻と共に赤坂見附までわざ／＼出かけて行つて拜觀した。しかし、御大喪の大典が、かう早く、まだ御即位五十年の御祝典をも擧げさせられない中にやつて來ようなどは夢にも思はなかつた。

明治天皇の喪の發表せられたのは、忘れもしない暑い暑い七月下旬であつた。市に離れた郊外では、その號外を翌日の朝でなければ見る事が出來なかつた。それは靜かな朝だつた。朝風く起きる事を例にしてゐる私は、深い新樹の涼しい陰に深く呼吸しながら、いつものやうに門の處にある郵便箱の處に行つた。

崩御の號外がそこに入つてゐた。

『あゝ、たうとう御かくれになつたか。』

かう思ふと、何とも言はれない氣がした。いろいろなことが胸に一緒にごたく／＼と集つて來た。

西南の役、そこでは私の父親が戦死した。つゞいて日清の役、日露の役には、私は寫眞班の一員として従軍して、八紘にかゝやく御稜威の凜とした光景を眼のあたりに見て來た。日章旗の金州南山の敵壘にかゝやくのを見て雀躍して喜んだ私は、私の血にも熱い日本國民の血の流れてゐるのを覺えずにはゐられなかつた。私は思想としては Free thinker であるけれども、魂から言へば、矢張大日本主義の一人

である。私は明治天皇の御稜威を崇拜せずにはゐられなかつた。それであるのに……。

私は黙然として立盡した。親しみの多い、なつかし味の多い、恐れ多いが、頼りにも力にもし申し上げた私達の明治天皇陛下は崩御された！

私は其日も出勤した。私は深愁に満された人達の顔を其處に發見した。街頭はしんとして、いつものやうな生氣と賑かさを持つてゐない。軒には弔旗がわびしく連りわたつてゐた。

御維新から今日までのことを考へると、いろいろなシーンが私の眼の前にちらつくやうな氣がした。維新の變亂、官軍の東征、江戸城の明渡し、つゞいて東京遷幸、私の初めて東京に來た時分には、維新の功臣もまだ年若く、江戸城の面影も處々に残つてゐて、所謂當年の參議連が箱馬車を駛らせて、丸の内を通つて行くのをよく見送つた。伊藤公もまだ壯年なれば、大隈侯もまだ爆彈の變に逢はなかつた。従つて陛下もまだ御壯年であらせられて、お話相手の群臣がその周圍に集つてゐた。

その明治の功臣も老い且つ凋落した。中でも伊藤公のハルピンの死などは、陛下に取つても大きな事實であらせられたに相違なかつた。功業の成つた曉に、さびしく死んで行かねばならない人間の悲痛な事實がひしと私の胸を塞いだ。

その夏は雨の多い夏であつた。天もまた悲むかとさへ思はれて、空には深い灰色の雲が封じ、雨が佗しく軒の樋を傳つた。氣候もいやに冷々した。洗濯した衣を干す日もないやうなこともあつた。郊外か

ら市街の方へ出て行く停車場までの路は、深い深い泥濘に埋められた。

庭の水蓮の白い花に終日長く雨が降りかゝつた。

宮中の模様は朝毎の新聞紙が報じた。常に陛下の周圍に侍して、大きな功業を成遂げるのを見て來た人達に取つては、殊に感慨が無量であつたに相違なかつた。さういふ人達は毎日のやうに、先帝の喪に侍した。

やがて御大葬——故郷の京都に御還幸あらせらるゝのではあるが、さびしい悲しい御還幸の儀式の時が近寄つて來た。私は今だに、その夜のことを忘るゝことが出來ない。又その悲しい御儀式のさまを追想せずにはゐられぬ。しかし、それが、私の近くの青山原頭で行はれたのであるから……。

私はしかし遂に門外へは一步も出なかつた。従つて大葬の時の市街の光景は此處に書くことは出來ない。その夜もさびしい雨が降つた。深夜に鳴りひびく弔砲の音を耳にした時には、

『あゝ、今、御出發と見える。』

かう言つて、妻と二人で、さびしく長火鉢に相對して坐してゐた。悲しい一夜であつた。

つゞいて乃木大將の殉死がまた私を驚かした。悲痛な感——一面悲壯を伴つた悲痛な感は、私の血を湧かすやうにした。戦争で、國の爲めに斃れた多くの勇士の魂が、そこに蘇つて來たやうな氣がした。

乃木大將の心理は、外國人などのとても窺ひ知ることの出來ないものであることを私は思つた。私は

一方日本國民のセンチメンタルであるのを歎くと共に、一方そのセンチメンタルであるがために、國に生氣あり、國民に生命あることを痛感した。情感的、情緒的の國民であることを感じた。

明治天皇の崩御も、乃木大將の死も、功業を樹つるといふことの悲劇であることを私はつくづく思つた。功業は人を滅さずには置かない。又、功業はある犠牲を要せずには置かない。

勝利者の悲哀、勇者の寂寞。さういふことがひし／＼と思ひ浮んで來た。

四十の峠

四十の峠を私は越した。

恐ろしい倦怠と單調と不安とが私を襲つて來た。書いても、書いても面白いものは出來なかつた。文壇の不振は矢張作者達の不振がその原因を成してゐた。

復活を叫んだ聲の下に、果して復活が來たであらうか。又、社會の虚偽に反抗の聲を擧げたその聲の下に、果してその虚偽は全く跡をかくしたであらうか。又自然主義の聲の下に果してすべてを新たにするやうな大きな藝術が來たであらうか。

安價な告白、小さな反抗、幼稚な完成、さういふものの中に、我々は甘んじ、得意になつてゐられるであらうか。

四十の峠を越してから、私の盲目な眼と心とは、明かに人生の一部を意識して來るのを私は感じた。

『こんな小説をいくら書いたつて仕方がない。』

かう私は思つた。

それから又、『外國の文學をいくら讀んだつて仕方がない。ダンヌンチオや、オスカーワイルドが面白いと言つたつて、その思想を模倣したつて仕方がない。新しいといふことは、一體、何ういふことだ。めづらしいといふことか、珍奇なものと言ふことか。今まで古いと言つたもの、その古いものが何故わるいか。根本とは、新とか舊とか言ふことにあるものではない。本當のことを捉へることにあるのだ。自己の思想でなくつて、自己の現象と言ふことだ。外國の文學を讀んで、模倣ばかりしてゐたつて、それが何になる。現に、日本の生活に觸れてゐなければ……。又、日本の國民性と相通じてゐなければ……。我々は讀書よりも、もつと深く日本の生活に浸らなければならぬ。』かう私は思つた。

しかし、さうは思ひつゝも、今までの樓閣が、すっかり固めてゐた城塞が俄かに崩れて了つたやうに、私は捉へどころのなくなつたのを覺えた。それに四十頃に入人間の誰でもが感ずる倦怠と單調とを感じて、何を見ても、何を聞いても、詰らぬ、色彩のないものやうに思はれ出して來た。文學者としての第一の條件である『フレッシシに感ずる』『驚異する』といふ心が頗る稀薄になつてゐるのを見た。

毎月きまつたやうに、催促されて、日限になつて、セツバ詰つて書く短篇がいやでいやで仕方がなか

つた。何うかして、これを脱却する方法はないかと思ひ迷つた。

『どうも、いやで仕方がない。また、書かなければならないのかと思ひますよ。原稿の催促は借金の催促よりもつと辛い。』などと私は言つた。

島崎君の生活にもその頃には大きな變遷があつた。君は夫人に死なれた。君は男の手で子女を見なければならなかつた。それに、君にも矢張私達の感ずるやうな倦怠と單調とを感じて來てゐるらしかつた。二階の書齋に全く閉居させられて了つたやうな生活、若い時のやうに外に出る氣にもならず、さうかと言つて孤獨に蝕められるやうな生活、さういふ生活から、島崎君も矢張何うかして脱却しなければならぬと思つてゐたらしかつた。

ある日、島崎君は言つた。

『何うも、中年先になると、修業をするといふ機關がなくなつて困りますね。若い人のためには、あり餘るほど教育の方法は立つてゐますけれど……』

『本當ですね。』

『何うも、もう一度、修業をしなければいけないやうな氣がしますね。』

かう言つた島崎君には、心中既にフランス行の計畫が動きつゝあつたのであつた。何等か大きな破壊をやつて、生活を一新しなければならぬと思つてゐた。で、やがてそのフランス行の話がきまつた。

私は外國には行きたいには行きたかつたが、さて行つて見て、何うなるものかをいくらか知つてゐた。私は外國には行きたいには行きたかつたが、さて行つて見て、何うなるものかをいくらか知つてゐた。戰地に行つた經驗のある私は、外國では生きた日本の小説の材に觸れるやうな機會に乏しいのを知つてゐた。しかし、さういふ意味でなしに、島崎君が今さういふ計畫を敢てして、ある破壊の上に新しい生活の發展をしようとするには、非常に賛成もしたし、又非常に羨しくもあつた。私も何も彼も破壊して同じく外國へでも行かうかと思つた。

さう思つた私には、私の生活と家庭とが餘りに平凡にすぎてるのを感じた。單調と煩瑣な束縛との中に、唯日が経つて行くばかりであつた。同じやうに、妻の顔は赤く、子供の群は悪戯に、朝は汗、夕は酒にすぎて行くのだつた。私には子供の死すらなかつた。妻の死すらなかつた。精神を動かして、一路新生に入つて行くやうな刺戟は何物もなかつた。私は平凡と單調とを呪つた。

従つて、島崎君のフランス行は、さういふ意味から言つても羨しかつた。愛子を失ひ、夫人を失はれたことは、悲痛な事實には相違ないが、一方そのために、さういふ自由を得られるのは、寧ろ私の平凡、單調より幸福であるときへ思つた。

それに、三年なり四年なり、島崎君に別れてゐるのが淋しく且辛かつた。且館をよして、始めて自由な體になつた時、『これからは閑になつたから、ちよいちよい來ますよ。』と島崎君に言つた。君と私とは、割合に、むしろめづらしく長く一緒の路を歩いて來た。一つ大に一緒にやらうと思つてゐた矢先であつ

た。それだけ私は失望した。

新橋から箱根まで送つて行つて、信州の志賀村の神津君などと一緒に、春雨の降り頻る夜に別を惜んで、『山口のいで湯の里の春雨の静かなる夜を別れ行くかな』といふ歌を手巾に書いたりして、國府津の停車場で、大勢の旅客の中にさびしく島崎君の乗り込んで行くのを見送つた。

島崎君は用事の都合で、神戸に一月ほど留つてゐた。私は私で、いつもさびしい苦しい時の避難地にしてゐる武州の耳町の寺に行つて、〇君を相手に地酒を酌んでさびしく暮した。

『兎に角、何うかしなければならぬ。』

かういふ念が寝ても覺めても念頭を離れなかつた。子供のことも氣になる。妻のことも氣になる。そして、もつとそれ以上に自分のことが氣になる。考へれば考へるほど、さうしてはゐられないやうな氣がする。この間の消息は、『一握の葉』といふ小説の中にいくらかは書いて置いた。その小説は初め『潮流に對して』といふ題にしようと思つたのであるが、實際、潮流に對した形は辛く且つ淋しかつた。イブセンの『建築師』や『ボルクマン』のことが犇と胸に迫つた。

島崎君の出發の時期の近くなつた頃、私は上州の藪塚の温泉に行つてゐた。春はもう闌けつゝあつた。紅い桃の花、白い椿などが二階の向うの竹藪の中に雜つて咲いてゐるのが見えた。ある日は雨が前の公園の八重櫻に注ぐやうに降つた。何處かでは、湯治客の無聊をなぐさめる蓄音機の音が微かに遠くきこ

えて來た。私は島崎君を思つた。そして手紙を書いた。『この春は田舎の里にひとりゐて波の上なる君をしのばん』この歌はその時出來たものであつた。

私の心の動搖は猶ほ長く續いた。落附いて家にも居られなかつた。私は旅から旅へと出かけた。舊友の顔を見る興味すらも起らずに、唯廣い大きな自然に面して立つことを望んだ。

その五月には、私は日光の廢寺に行つて、そこで自炊生活、孤獨生活を始めた。ユイスマンスの“En Route”などが痛切に私の胸に響いて來た。

廢寺の半年

寛から清い水のちよろちよろ落ちる大きな水桶を前にして、私は終日深い静かな瞑想に耽つた。深く穿たれた谷には、溪聲が湧くやうに高く鳴つた。

獨歩と一緒にやつて來た寺は、洪水のために、すっかり流されて、その山門のあつたあたりには、今は大きな廣い道が出來て、電車が輕快に駛つてゐるのが見えた。それでも、をりくゝ其處に散歩に出かけて行つた私は、昔の池のあつた址、石階の崩れた跡、綺麗な清水の湧き出してゐた古跡などを指點することが出來た。しかし、何も彼も全く廢墟になつてゐた。裏の杉の森も伐られて、あたりは昔の面影もないほどに開けすぎてゐた。

私は今と、その時分とを引比べて考へて見ずには居られなかつた。その頃と今との間には、自分でも想像することが出来ないやうな變遷と差異とが横つてゐた。それは半は『時』の所行で、半は人生の所爲であつた。昔は希望があり、前途があり、不可思議があつて、目かくしをされた馬車のやうに唯幕地に前へ前へと進んだが、唯進みさへすれば好いと思つたが、今はすつかりその目かくしが取除かれた。左顧右盼したり、躊躇逡巡したりした。そしてその通つて來た人生の事實やシーンは、丁度其處に微かに跡をとめてゐる崩れた石階や、石や、池の跡や、清水の跡などの深草に埋められたさまに似てゐた。

私達は日に日に墓を築きつゝあることを思はずには居られなかつた。

溪や谷も昔とは著しく趣を異にしてゐるのを私は見た。その時分には、溪の中央に細長い石原があつて、そこに楊柳だの、榛だの、檜だの、林があつた。細長い、をりをり波に洗はれさうな柴の組橋が長くかつてゐて、そこを寺の婆が毎日渡つて、向うに行つて畠などを拵へた。桑の苗木なども栽ゑてあつた。老僧はその石原を借りて、最後には隠居所でも建てる積りであつたらしかつた。それがすつかり流されて、今は一面の磊々とした石原となつて了つた。そこにも人の事業の空しさが指さされた。

ある夜は、月が明るく閉めない障子を照した。昔に變らず、慈悲心鳥がキ、キとさびしく鳴いて通つた。私は時には深夜ひとり目覺めた。孤獨のさびしさが背と胸に迫つた。『故人既無迹、往事總悠悠、唯

有空山月、夜深照枕頭』かうした詩がひとり手に、私の口の上つて來た。

廢寺の屋根は漏り、庇は傾き、根太は腐つて、歩くところどころキシ／＼と軋つて鳴つた。疊は赤くなつてゐた。その中に私はひとり埋められるやうにしてゐた。

門の傍にある小さな池には、あたりの荒れたさまを繪にでもするかやうに、一つ二つ色の鮮やかな杜若が咲き、青い蒲や藺が細く生えた。そして夜はそこから蛙の戀の歡樂の歌が湧くやうに聞えた。

時には霧が一間先も見えないほど深く立籠めることもあつた。夕暮は山は淋しく、人通も稀れに、杉の尖りと山の屹立とがくつきりと碧い晴れた空を刺した。三尊佛のある大きな本堂の扉は、びつしやりと閉つて、深い神秘が私の魂に迫つて來るやうな氣がした。

ゴンクウルの『陥穽』

フロオベルやゴンクウルの名を始めて私の知つたのは、ドオデエの『巴里の三十年』を讀んでからであつた。ヅラやドオデエの作品には、割合に早く、且つ多く接した私も、フロオベルとゴンクウルには名のみあこがれて、その作品を容易に手にすることが出来なかつた。それでもフロオベルの方は作の二三が、上野の圖書館にあつたので、『感情教育』と『サランボウ』とは解らずなりに兎に角それを讀んで見る事が出来た。

ゴンクウルの作品は、しかし何處にもなかつた。又讀んだ人もなかつた。その癖、ドオデエの記事で見ると、そのナチュラリズムの連中にも非常に尊敬され、勢力もあり、作品もめづらしい新しいものであるらしかつた。私は何うかして、一冊でも好いから、その作品を得たいと思つた。と、アメリカ版の安い本の中に、ふとゴンクウルの『ジェルミニイ・ラセルトウ』の名を発見した。私はすぐ註文した。二月ほど経つて、その本が私の手に入つた。

それは無論英譯である。

私はすぐ讀んで了つた。其時分の幼稚な私の頭では、そのすぐれた價值を十分に味讀し且つ批判することは出来なかつたけれども、又はその印象主義の作者であることを十分に知ることが出来なかつたけれども、それでも兎に角、變つた新しい作品だと思つた。ゾラの煩瑣な描寫、くどいくどい叙述をのみ自然派の文藝と思つてゐた私は、其處に簡潔な描寫と省略とを見て不思議な氣がした。フロオベルやドオデエなどのものとは、丸で違つた貴族的の感じのするのを覺えた。

で、その一卷の『ジェルミニイ』は、私の書齋の珍書の一つになつた。人々が争ふやうにして借りて行つた。それから少し経つて、私は又『シスター・ヒロメヌ』を手に入れた。これにも感心した。獨歩にも貸せば、島崎君にも貸した。白鳥君も持つて行つて讀んだ。

段々ゴンクウルに對する私の知識は明るくなつて行つた。『生』を書く時分には、まだその感化を受けなかつたが、『田舎教師』では、すっかりその深い影響を受けた。その時分、私は又『ルネ・モウブラン』を手にした。私は書きながら、机の上にそれを置いて、そしてをりをりを明けて見た。

『自然派の中でも、ゴンクウルが一番藝術的だ。その證據には、時代が経つても古くならない。』かう私は常に推賞した。

社で毎日机を並べてゐる前田君に、新年の雑誌の讀物として、『ジェルミニイ』の翻譯を私は勧めた。前田君はそれを快諾した。そしてそのあくる年の雑誌にその一部を載せた。

處が、生田長江氏がその譯の正確でなく且つ脱却してゐるところの多いのを大々的に批評した。それから不思議に思つて、調べて見ると、私の前田君に提供した英譯は、頗る不完全なものであることがわかつた。前田君は一時その翻譯を中止した。

しかし前田君に取つては、それが不愉快な腹立しいことであつたに相違なかつた。君は『ジェルミニイ』の完本をあちこちでさがした。丁度千葉江東君が持つてゐたので、後にはそれを借りて來た。

前田君は、何うしても、『ジェルミニイ』の完譯を成就しなければ、業が煮えて仕方がないらしかつた。そのため、君はフランス語を學んだ。何うしても、英譯では駄目だ。原書からやらなければ駄目だ。君はかう深く思ひ込んだ。

日書店で計畫した西洋文藝叢書の一冊は、それで、君の『陥穽』を出版することを廣告した。

『ジェルミニイ』の翻譯ほど譯者の苦んだ翻譯を私は見たことはないと思ふ。前田君は殆ど三年以上の月日をそれに費した。原書を傍に、英譯二冊、他にフランスの辭書を備へて、大きな机一杯にして君はこつこつと一行やつては消し、一行やつては消した。それに前田君は丁度五書店をやめることになつたので、生活の方の苦痛が、その一行一行の中に強く刻まれたといふ形があつた。

『好い加減にしたら好いぢやないか。』
友達ばかりではない、私までもさう言つた位だ。しかし、君は頑としてきかなかつた。その『ジェルミニイ』の譯を完成するまでは――。

大正三年の十一月だ。前田君はその翻譯を持つて、日光の山寺へ出かけた。

私も一緒に行つた。

私は君の志を貴しとした。且つその山寺の生活のさびしさを思つた。

その一年前に、私の行つてゐた廢寺は、新に住職を得て塞つてゐたので、私達は仕方なしに、Hといふ寺を借りることにした。前田君はN君を伴れて來てゐた。

Hといふ寺も好い寺であつた。秋の紅葉はまだいくらかは残つてゐたが、山の頂には既に雪が白く壁をつくつて光つてゐた。大きな深い杉森を隔て、D川の流るゝ音が瀧津瀬のやうにきこえた。それに

雜つてをりをり電車の通る音がした。

前田君とN君とは、二階の二間に別々に机を置いた。N君はドストイフスキイの『罪と罰』とを翻譯してゐた。

前田君の陣取つた室の窓を明けると、山内の殿堂を包んだ黒い杉森の上に、男體と女峰の晴雪が日に輝いた。

『好いですね。なんとも言はれませんかよ。』

かう前田君は私を顧みて言つた。

N君のゐる室の窓の方から見ると、稻荷川の對岸の丘陵の連亘が柔かな線を見せて靡いてゐて、杉森の此方には青い菜畑などが見えた。S寺の五重塔の靜かに立つてゐるさまは繪のやうであつた。窓の下には梅もどきの赤い實があたりを明るくした。

『好い、好い、此處なら出來さうだ。』

前田君はかう言つて、電燈の紐を長く、大きな机の上にまで來るやうにして、そしてのんきさうに其前に坐つた。

其時は私は二三日ゐて、東京に歸つたが、十二月の初めになつてから、さびしいだらうと思つて又出かけた。今度は私も半月はゐる積で、書くものなどを準備して行つた。

私は下の二間を占領した。一間の方には長火鉢を置き、その傍に机を据ゑた。私は夙起、前田君は宵張りの朝寝坊と言ふ方なので、私が五六枚書いた時分、前田君はいつも起きて来て、體を拭いたり顔を洗つたりした。

前田君の翻譯の苦心は慘澹たるものであつた。『昨夜は二時まで起きてゐましたけれども、二枚しかかけない。ゴンクウルの翻譯は實に難かしい。形容詞が非常に多く、それが一字一句苟くもせず、考へれば考へるほど意味深くつかつてあるので、何うも日本に言葉がなくなつて困る。』かう言つて、その一節一節を出して私に見せたりした。原書に據れば據るほど翻譯が難かしくなるらしかつた。

N君は先月の末にもう東京に引揚げてゐた。山は日に日に寒くなるばかりであつた、霜は庇を白くし、肌を刺すやうな風が絶えず吹いた。前田君はN君とゐた頃の山居の興を歌に託して、それを私に見せたりした。『S寺の五重塔に、夕日のさす具合は、何とも言はれませんでしたよ。實際、かういふ山の中にあると、勞働と沈黙と言ふことを染々感ずる。實際トランプ以上ですな。』などと言つた。

前田君はその時まだ百四五十枚しか翻譯をやつてゐなかつた。『こゝで二百枚にして行けば上出来なんですけども……とても駄目でせう。』かう言つて、佯びしさうな顔をした。その癖、翻譯にかゝつてからもう一年半も経過してゐるのだつた。

私は朝は暗い中から起きた。やがて寺の婆さんが火を持って来て呉れる。飯も汁もやがては出来る。

私は前田君の下りて来るのを待たずに、朝飯をすまして、そしていつも机に向つた。

私は獨歩と一緒に來てゐた時のことなどをりをり頭にくり返した。

ある夜は、灯の町から暗い杉森の中を抜けて歸つて來た。星の燦々ときらめくのを見ながら、過ぎ去つた年月の話をしたり、無關心の自然について深い歎息を洩したりした。

私達は月の二十日近くまでゐた。

『ジェルミニイ』の翻譯は、その後また一年以上も世に公にされなかつた。前田君は信州の山の中に行つたり何かして、頻りにその完成を期したが、何うも思ふやうに行かないので、又一年経つた。そして三年目の秋になつて漸く世に公にされた。

私は早速一讀した。私は喜ばずには居られなかつた。ゴンクウルの唯一の翻譯——外國でも、難かしいのと、貴族的なものと、素人受けがしないので、容易に翻譯されないゴンクウルの譯が、この日本の文壇に出來たといふことは、又その譯が他に見られない忠實と努力とを以て、英譯などよりも遙かに以上の價值を以て譯されたといふことは、殊に私に取つて、喜ばしいことであつた。前田君の苦心の跡は、句法、文法などの上にも非常に細かくあらはれてゐて、ゴンクウルの所謂『アカデミイの文でない文章』を目のあたり見るやうな氣がした。

前田君に逢つた時。

『何うです、今度はルネ・モウブランあたりをやりませんか。』
と私が言ふと、

『いや、もう懲々しました。あんなむづかしい翻譯は二度とふたゝび手をつける氣になりません。』

あ る 墓

今は、電車の線が川に添つて出来て、あたりがすっかり明るく開けたけれど、二三年前までは、其處はさびしい、野趣に富んだ川添の路であつた。其處には川に橋がかゝつてゐて、墓地だけ寺から離れてゐるやうなところもあれば、松の樹の細かい葉に夕日が靜かにさして來るやうなところもあつた。何うかすると、寺での讀經の聲などもした。

この川添の路は、一條二條の横街路を貫いて、長く長く續いてゐた。春は筍の出る竹藪、ある大名の大きな門、河の岸には卯の花などが咲いて、夜は螢が明滅して水の上を飛んだ。

私はよく其處を散歩した。

ある時、私は引つけられるやうにして、その左の岸にある小さな寺の墓地へと入つて行つた。それは周圍五六十間ほどの小さな墓地で、椿が咲いてゐたり、木槿が紅い白い花を見せてゐたりした。新しい

塔婆、苔の蒸した墓石、無縁らしい墓があるかと思ふと、大きな大理石の墓があつたりした。細い路が縦横にその間を通じた。

私の捜す墓はすぐ發見された。一堆の土饅頭であつた。それでもお詣りするものがあると見えて、櫛などが供へてあつた。その葉が半ば萎れて黒くなつてゐた。塔婆が一本立つてゐた。

私は感慨無量たらざるを得なかつた。私はロシアの作家の小説の最後の章のシインの中に立つてゐるやうな氣がした。突き詰めた女の心、新しい女の心、さういふ心や空氣がこの日本に動いたといふことは、考へれば考へるほど大きなことであつた。ニヒリスト以前のバザロフ、それよりも、もつともつと大きなことであつた。私はじつとしてその土饅頭の前に立つた。

妹の墓の傍へ……。かう言つて死んで行つた女の胸には、新しい女だとは言ひながら、矢張センチメンタルな、情緒に富んだ心が一杯に充たされてゐたのであつた。私はその周圍を見た。成程妹の墓らしい石があつた。

私は其時の光景を想像した。と、あらゆる世界の叛逆者の末路が一纏めになつて私の眼の前に集つて來るやうな氣がした。暫くして私は其處から出て來た。

その次に行つた時には、S君と一緒にあつた。S君の顔にも悲痛な色が上つた。

『本當に、意味が深いですな。……さうです、さうです。』

などとS君は言つた。

すぐ言葉をついで、『かうして、かういふ處に横つてゐるといふ事が面白いですな。意味がありますな。』私達はそこから出てから、個人主義の共和政治にあらはれた形と專制政治にあらはれた形とを話しながら歩いた。この二大思想は、今日の世界の謎である。又、大切なる鍵である。何方にか基礎を固めなければならぬものであつて、そして又容易に何方にも固めることの出来ないやうなものである。單純な壓迫などで甘んじてゐられないものである。又、安心してはゐられないものである。もつと深く眞面目に考へなければならぬことである。

『ロシアは面白いですな。』

かうS君は言つた。

『しかし、ドイツのことも考へて見なければならぬ。』

私はかう言つたが、それつきりで二人は黙つて歩いた。

それは春であつた。花が明るく杉の絶間から見えた。鳥は美しい聲でその春の歌をうたつた。空にも土にも、物の發育する春の光が満ちあふれて、向うの松林の中には、大工の鉞をつかふ響が賑やかにきこえて來た。

電車が出來てからは、私は滅多にその河添の道を散歩するやうなことはなくなつた。ある時、通つて見ると、その墓のある墓場の周圍は、石垣で護岸をされて、松も伐られ、縁も少なくなつて、大きな通か
らあらはにあらはれて見えてゐた。

飛行機

風のうなりのやうな音が空を撼して聞えると、郊外に住んでゐる人達は、皆な家から飛び出して空を仰いだ。

路の角、木の上、二階の欄干、其處にも此處にも人の姿が見えた。『や、飛行機！ 飛行機！』かう言つて子供等は走つて行つた。

『私にも……私にも……』

稚ない子供が縁側に取残されて泣いてゐるのを、一度出かけた妹が、急いで戻つて來て、搔きさらふやうにして、抱いて飛行機の見える方へ行つた。

勇しい唸聲が晴れた碧い空に漲つて、朝日の影を帯びた飛行機が、大きな翼か何かのやうにかなり早い速力で通つて行くのが指された。

『や、人が見えらア。』

かう子供達は言つた。

東京の三十年

『何れ？ 何れ？』

細君も出て来て、それを仰いで、『黒いのが人かね、危ないね。まア。』かう言つてその白い顔を上にした。

その飛行機は、時には二臺も三臺も揃つてやつて来た。代々木の練兵場が近いので、私達はその飛行機が低く廻轉して下りて行くさまなどをも明かに見ることが出来た。時には空中の怪魚のやうな形をした大きな黄い飛行船などもやつて来た。スクリウの廻轉するさまと、その音と、機關から出る薄白い烟とが子供達を喜ばせた。

ある日は、號外が午後の静かな屋敷町を騒がせた。『え、さつき来た飛行機が落ちたつて？ まア、さつき来たのが……。乗つてゐた人は死んだの？ まア、可哀相にねえ。だから、飛行機なんかに乗る人は命がけてなくつちや出来ないわねえ。』

その飛行機は、武蔵野の人のゐない麥畑の緑の中か何かに垂直になつて墜落して行つたのであつた。若い二人の中尉は折重つて……。

しかし、さうした犠牲者の出る度に、飛行機の航空術は、次第に巧妙になつて行つた。派手な名聲と突詰めた事業に對する氣分とは、次第に多くの飛行家を集めるやうにもなつた。飛行家は話した。『機の上から見た東京市は決して家屋や烟突ばかりではありませんよ。樹や緑がどう御座んすよ。さびしいも

んどすよ。』などと言つた。

東京市に何か大きな式典などのある時には、きまつて、飛行機は二臺も三臺も揃つて、所澤からやつて来た。時には、低空飛行をやつて、銀座や日本橋の人家の上五六十米のところをわざと低徊して飛んで行つたりした。ある時は、大きな飛行船が、青山の練兵場の上で、その操縦力を失つて、不思議なその怪魚が、信濃町の電車の停留場の上に宙有にさまよつてゐたことなどもあつた。電車の窓からは人達が皆覗いた。『大きなもんですな。』

所澤の花柳界の話などを聞いた時には、『さうだらうな。何うしても命がけの仕事だからな。その位の歡樂が、飛行者にさういふ危険を敢てさせるやうな點もあるからね。』などと私は言つた。

スミスが来て、強風烈風、颶風とも言ふべき空に、巧みに宙返りをやつて見せた時には、満都の人は皆驚嘆の聲を發した。私はその時裏の庭に近い門のところで見てるた。とてもこの風では駄目だと思つた。と、急に凄じい唸聲が荒れた空に漲りわたつてきこえた。機は小さく高く擧つて、そこから糸のやうな青い烟が尾を曳いたやうに靡いて見られた。『えらいな！』かう思つて見てみると、機は急に宙返を大きく二度も三度もやつた。そして又ぐうと高く擧つて行つた。私は思はず拍手した。

スチンソン嬢の来た時には、私はその宙返りをする處へ行く電車の途中で見た。矢張巧みなものであつた。

かうした飛行機を空の上に見ると言ふことは、三十年前の東京に取つては、實に夢想だもしなかつた文明の進歩であつた。電話、電車ですら、昔の人達を驚かすに足るのに、魔法ぢやないか、不思議だなどと思はせるのに……。

ヨオロツバの戦場に於ての飛行機の活躍などもよく新聞紙上の記事となつた。かと思ふと、S中尉——飛行界の第一人者と言はれ、又、選手の第一人と言はれたS中尉が、世間の評判を根に持つて、『何の糞！』といふ風に無理をやつたために、三百米の高空から墜落して、飛行心理のいかに重いかといふことを人々に思はせたりした。

空を飛ぶ鳥のやうに……。かういふ理想は人間は昔から持つてゐた。例のダ・ビンチなどの事業の中にも、さうした計畫が企てられてあつた。それを文明は果して如何なる點まで進歩させて行くであらうか。

今でもをりをりその飛行機のうなり聲が私の書齋の窓を撼して行くと、私は立つて外に飛出して行つたり、障子を明けてあたりを見廻したりした。時には、飛行機が低く、私の裏庭の梧桐の木の梢の上に鳴つて動いて行くのなどが見えた。

——花袋全集 第十五卷 終——

解 説

中 村 武 羅 夫

作家の人間や、生活を知り、その心を覗ふには、作品のみに便るわけにはいかない。日記とか、手紙とか、或ひは感想などに依ることが便宜である。——作家といふものは、その作品の世界に於いては、自分の心を託して、いくらか示して見せることはあつても、容易にその全貌をのぞかせるものではない。それが日記とか、手紙とか、感想などの類ひになると、その心でも、生活でも、人間でも、端的に、直接に、赤裸々に見せてくれるのである。

殊に田山花袋氏のやうな傾向の作家にあつては、作品から直接に、作者の人間を知ることが困難である。廣く全體から考へると、全部の作品の上に、田山花袋氏といふ作者その人が、示されてゐるではないかと、或ひは言へないことはないかも知れない。それは、その通りである。どんなに微妙に、作者が作品の背後に隠れてゐても、どんなに客観性を持つた作品でも、どこかに作者の心なり、姿なりが覗い

てゐない作品といふものがあるものではない。だから田山氏の作品にも、田山氏の人間や、生活や、心が、どこかに現はれてゐないとは言へないのである。

だが、田山氏は人も知るやうに、平面描寫を主張し、作品の客観性といふことを、極度に重んじた作家である。作品の上に、作者の心や、姿が、ナマのまゝで現はれることを甚だしく嫌つて、作者は、努めて作品の背後に隠れ、作品だけを、前の方に浮き出させることを、念願としてゐた。——どこの、どんな人間が書いたのか、そんなことは誰にもわからなくていい。イヤ、それを分らないやうにして、ただ作品だけがそっくりそのまゝ、独自の世界として、宙に浮び上つてゐるやうな形こそ、上乘の作であるとした作家である。だから、或る作家の作品には、作家の人間や、生活が、そのまゝ、作品の上に、顔を出してゐるやうなものはないことはないが、田山氏の作品の場合には、作者の姿といふものは、かなり巧妙に、作品の後ろに隠されてゐるのである。——長篇小説と、短篇小説との區別はなく、田山氏の作品は客観性が豊かなので作品を通じて、直接、作者の人となりや、その生活を知ることがむづかしく、また、作者の氣持や、心を覗き見ることが、容易ではない。

私が、以上のやうなことを、わざ／＼説明してきた所以は「花袋全集」十八卷の中に於いても、この「感想集」一巻の占めてゐるところの重要性を、十分考へてもらひたいと思つたからである。もちろん他の諸卷にも、それ／＼の深い意義があることは、言ふまでもないことだ。が「感想集」などといふと多くの人々は、軽く考へてしまひ勝ちかも知れない。しかし、田山氏のやうな作風の作家の全集の場合殊にそれが、日記とか、書簡などを含んでゐないのだから、この「感想集」の一巻こそ、田山氏の人と生活と、それから人生や、藝術に對する考へ方を知る上に、重要な鍵であることを知らねばならぬ。この意味に於いて、この一巻こそ、十八卷の全集中、さながら寶玉の如く、かゞやいてゐるものだと少くも私はさう信じてゐるのだ。

二

「インキ壺」が、初期の「文章世界」誌上に、毎號掲げ初められた當時、その新鮮な魅力に惹きつけられて、「文章世界」を手にすると、毎號々々眞先きに、貪ぼるやうにして讀んだことを覚えてゐる。一度だけでは足りなかつた。二度讀み、三度讀み、繰返して讀んだ。何度でも繰返して讀んでゐるうちに、藝術に對し、人生に對し、また、個性とか、心理など、いふものに對して、だん／＼ハッキリと眼が開いてゆくやうに感じたことを覚えてゐる。

人間は一生の間に、どれくらゐの書物を読むものか知らないが、眞に心の糧となり、心眼を開いてくれるやうな書物に打つかることは、そんなに度び／＼あるものではないだらう。私なども、今までに書物を読んで、さういふ氣がしたのは、數へるほどしかない。小栗風葉氏の「青春」を讀んだ時と、ルツソオの「懺悔録」を讀んだ時と、トルストイの「アンナ・カレニナ」を讀んだ時と、それからこの「イ

ンキ壺」を読んだ時とであることを、私はハッキリ覚えてゐる。

「インキ壺」には、直接に田山氏の人生観が、述べられてゐるわけではない。また、人生問題が、語られてゐるわけでもない。徹頭徹尾、文學について論じ、小説について語られてゐる。

この「インキ壺」が書かれたのは、ちやうど田山氏としては、作家生活の最盛期である。年齢にして四十歳前、作家活動としては、「蒲團」を書いた後、一方に長篇小説としては「生」とか、「妻」とか、「縁」などの三部作、その他「田舎教師」を書き、短篇小説としては、「一兵卒」や、「土手の家」などを書きながら、一方に「インキ壺」を書いたのである。

即ち、創作の才能が、一番高潮した時代であり、本當に油が乗り切つた時代である。

また、田山氏個人を離れて、文學史的に見れば、ちやうど明治四十年以降の二三年の間で、日本の自然主義文學の興隆期である。「蒲團」などに依つて捲き起された自然主義文學運動が、燎原の火の如き勢ひを以て、日本文壇に擴がりつゝ、はあつたけれども、それでも一方には、反自然主義文學運動にも、まだナカ／＼根強いものがあつた。

さういふ情勢の中に於いて、自然主義文學一方の驍將たる田山氏が、たゞ單に、作品の實踐のみに閉ぢこもつてゐられないやうな氣分にまで驅り立てられたことは、當然と言はなければならぬ。——田山氏の心理の上に、果してさういふ意識があつたか、或ひはなかつたかは問題だが、意識したと、しな

いとにかゝはらず、當時の情勢から批判し、解剖すれば、さういふ結果に判斷することが、決定的^{たゞ}なはづれてはゐないだらう。

もちろん、だからと言つて「インキ壺」が、單に自然主義文學を主張する戰術だけのために書かれたものでないことは明らかだ。そんな狭いものでないことは、讀んで見れば、誰にもすぐに分ることだ。

「インキ壺」の中には、何ものにも偏せず、何ものにも囚はれないところの田山氏の藝術に對し、小説に對する心が、意見が、考へが、それは藝術觀とか、小説論とかいふやうな、そんな固くるしい形を取らずに、田山氏の氣持そのまゝに、心の姿そのまゝに、流るゝ如く自然の形を以て、書き現はされてゐるのである。

當時、この「インキ壺」を貧ぼり讀んだ者、また、これに依つて、小説とか、藝術に對して、眞に心の眼を開かれた者は、必ずしも私一人ではないだらう。時の文壇が「インキ壺」に依つて、どんなに大きな影響を受け、どれだけ豊富にされたか知れない。——今改めて讀み返して見ても、さすがは一代の巨匠が、その蘊蓄を傾けてゐるだけあつて、形は斷片的ではあつても、搖ぎのない鬱然たる巨木の面影を以て、しつかりと藝術の土壤の中に、大きく根を張つてゐることがわかる。

三

「花袋文話」は、「インキ壺」の、もつとくだけたものと思へば、いいだらう。「インキ壺」に於いて、直

截に、断片的に、素朴に語つてゐるところの藝術観、小説論を、「花袋文話」の中ではもつと系統的に、もつと平易に、明らかに後進を教へ導びかうとするやうな意圖を以て、述べてゐるのだと思へばいいだらう。

最近になるに従つて、斯ういふ性質の文章を書く人が、だん／＼少くなつてしまつた。小説、藝術に心に向ける人々の上に、どれくらゐる大きな役割を果すか知れないやうな文章だ。

「卓上語」は「インキ壺」の後に書かれたもので、恰も「インキ壺」と同じ性質のものだが「インキ壺」ほどの潑刺さ、元氣さ、新鮮さは乏しい。が、それだけに圓熟してゐる。——文章が、ではなくて、氣持である。

「泉」の中のすべての文章は、暗示に富んで、ナカ／＼意味が深い。これは恐らく、田山氏の思想の轉換期に書かれたものだらう。

即ち、初期のセンチメンタリズムから自然主義に、自然主義を突き詰めて、平面描寫の主張に走つた田山氏は、更に、自然主義を乗り越えて、象徴主義に心を惹かれたらしい。「扉に向つた心」などには、その消息が、あり／＼と窺はれるやうに思ふ。

斯ういふ心境、斯ういふ心の状態の下に、「残雪」だとか、「廢驛」だとか、「戀の殿堂」だとか、「百夜」だとか——等々の後期に屬する一聯の長篇小説が書かれたのかと思ふと、實に意味が深くもあるし、面白くもある。

「インキ壺」では、ひたむきになつて藝術文藝を語つてゐる田山氏が、「泉」に於いて、初めてその心の姿を覗かせて、われ／＼の前に示してゐる。藝術文藝から、一步宗教的な境地に、足を掛けてゐるところが、實に面白いではないか。

田山氏の藝術観、小説論を知るには「インキ壺」を、晩年に近い心を覗くには「泉」を、それから田山氏の生ひ立ちを縦に知るためには、「東京の三十年」をと、私は人々にすゝめたい。

その作品に於いては、決して直接には、自己の生活や、自己の生ひ立ちなどを語らない田山氏が、「東京の三十年」に於いては、九歳から十歳くらゐの本屋の小僧さん時代の自己から、貧乏時代苦學時代の自己、文壇に頭角を現はすまでの煩悶焦慮と、いよく文壇に現はれてからの自己とを、極めて率直にわれ／＼の前に示してゐるのである。

自己の經歷、自己の生長と、推移とを語ることを中心として、しかも同時に、東京といふもの、三十年間の移り變り、世相の變遷、それから文壇の状態や、流れや、動きなどの空氣や、こまかい陰影までも、さながら手に取るやうに、生き／＼と描いて見せてゐる。「東京の三十年」は、縦に田山氏の經歷や生長の迹を知ると同時に、また、最も生き／＼とした文壇史として、貴重な意味を持つてゐるものだ。

(終)

昭和十二年一月十三日印刷
昭和十二年一月十八日發行

花袋全集第十五卷
預約價金壹圓八拾錢

著者 田山 錄 彌

發行者 川 俣 馨 一

印刷者 井 上 源 之 丞



東京市小石川區竹早町三十二番地

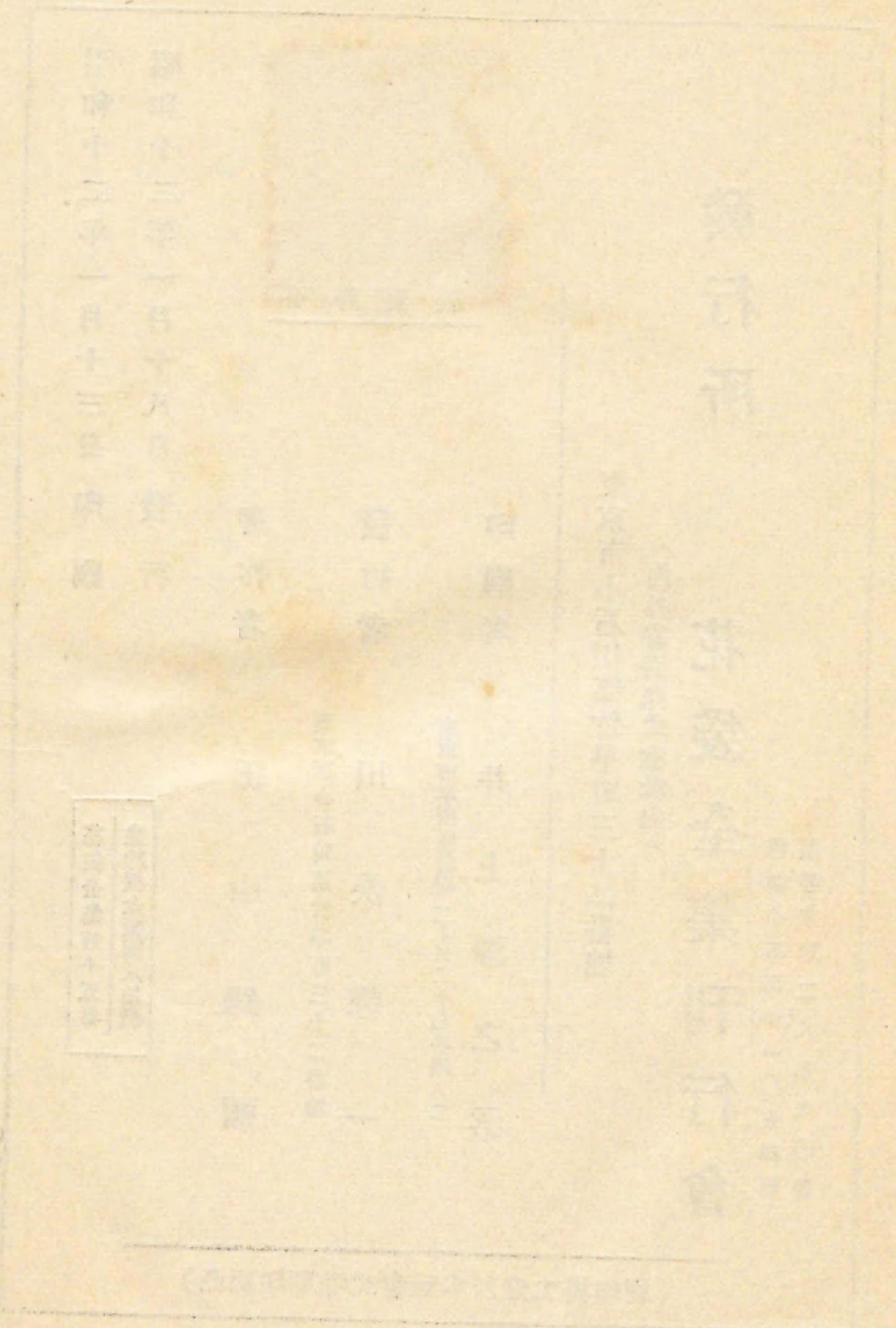
(內外書籍株式會社內)

發行所 花袋全集刊行會

電話小石川(85)一〇五四番
振替東京二八七九〇番

(刷印場工分所本社會式株刷印版凸)

IL9E75



Vertical text on the left side of the stamp area, possibly a date or reference number. The text is very faint and difficult to read, but appears to be arranged in a vertical column.

